田辺町埋蔵文化財調査報告書　第３集

田辺町遺跡分布調査概報

1982

田辺町教育委員会

田辺町遺跡分布調査概報

1982

田辺町教育委員会

図版第 1　興戸 2 号墳付近出土碧玉製腕飾類

図版第2　　堀切7号墳出土人物埴輪

図版第 3　善賢寺跡出土軒丸瓦

1

2

3

4

5

7

6

8

図版第 4　普賢寺跡出土軒平瓦(上)と興戸廃寺出土瓦類

9

10

11

12

1

3

4

8

5

6

9

図版第5　三山木廃寺出土瓦類

1

3

4

9

16

17

15

18

序

田辺町内には、史跡指定を受けました大住車塚古墳をはじめとして多くの古墳などの遺跡が知られております。天王地区からは今から数万年も前の時代のものもみつかっています。これらは、我が祖先が日本列島に生活の場を求めて以来、長い年月にわたって守り伝えられてきた、かけがえのない民族遺産であります。この貴重な遺産が失なわれないよう、また永く未来へ伝えることは現在の我々の使命とも言えます。

今から10年前に『京都府遺跡地図』が刊行されましたが、それによりますと、本町内には88ケ所の遺跡が登載されています。しかし、その後町内にも開発の波が押し寄せ、各種の行為により、先の民族遺産が改変されたり、失なわれたりしておることも事実です。また、その行為により、偶然にも遺跡が発見される場合もあります。このようななかで『京都府遺跡地図』が実情にそぐわなくなってまいり、現時点での本町独自の遺跡の把握が必要となってまいりました。

そこで、昭和56年度事業として、国庫・府費の補助を受けまして、遺跡詳細分布調査を実施いたしました。その結果、遺物の散布地を含め約70ケ所の新しい遺跡の発見に至り、『京都府遺跡地図』登載分とあわせて約160ケ所の遺跡が町内にあることがわかりました。

住宅地の造成などにより、各種の開発が行われますが、地下に眠る埋蔵文化財は破壊されやすいものです。目の前の要求にとらわれず、住民の宝である文化財を守り伝えていくことは重要なことです。

本書は当町所在の埋蔵文化財の基本台張となるものであり、今後の文化財保護行政を進めていく上で大いに活用して行く所存であります。また、本書が多くの方々の目にふれ、埋蔵文化財に対する認識が高まり、学術研究ならびに郷土史研究に多少なりとも役立つことを願います。

末筆になりましたが、調査中および報告書作成にあたりまして、関係諸機関、関係諸氏のご指導・ご協力を賜わりましたことをここにしるし、深く感謝するしだいであります。

昭和57年3月20日

田辺町教育委員会
教育長　籔　下　撤　一

例　　言

1. 本書は、昭和56年度国庫補助事業として、田辺町教育委員会が実施した田辺町内遺跡詳細分布調査の概要報告書である。
2. 現地調査は、昭和56年11月16日に開始し、昭和57年1月19日に終了した。
3. 調査の組織は下記のとおりである。

調査主体	田辺町教育委員会教育長	籔下撤一
調査指導	京都府教育庁指導部文化財保護課	
調査担当者	田辺町教育委員会社会教育課社会教育主事	西川英弘
	竜谷大学卒業生	鷹野一太郎
調査事務局	田辺町教育委員会社会教育課（課長　博田武則）	
調査補助員	小林豊彦、南光頼、常盤井智行、村川俊明、義則敏彦、谷浦健史、牧野秀哉、中村恵、打本尚子	

4. 本書をまとめるにあたって下記の諸機関ならびに諸氏には、未公開資料の調査・掲載および原稿執筆等、種々の協力を得た。ここに記して厚く謝意を表する。

   京都国立博物館・府立山城園芸研究所・大住小学校（校長　小牧孟）・普賢寺（大御堂観音寺住職　三神栄昇）・山崎神社（総代　中川楢男）・田辺郷土史会（会長杉本寿万蔵）・田辺町文化財保護委員会（委員長　村井博）・山城考古学研究会・粟野謨（大住中学校）・鈴木重治（同志社大学）・江谷寛（大阪教育大学）・林正（田辺小学校）・海老瀬敏正（山城考古学研究会）・吉村正親（京都市埋蔵文化財研究所）・中井均（城郭史研究会）・堀口高好（田辺町松井在住）・沢井公雄（田辺町岡村在住）・出島茂（田辺町飯岡在住）・今中久男（田辺町宮津在住）・南光三（田辺町水取在住）
5. 本書に添付した遺跡分布図は、田辺町都市計画課発行（昭和48年）の1万分の1地形図を2万分の1に縮小したものである。
6. 本書のうち、第Ⅲ項の一部については、江谷寛・鈴木重治・海老瀬敏正・吉村正親・林正の各氏に執筆願った。その他については、西川・鷹野両名が執筆した。文責は、文末に示した。
7. 本書の編集は、調査を担当した西川・鷹野両名が行った。編集にあたっては、京都府教育庁指導部文化財保護課技師奥村清一郎氏の協力を得た。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに …… 1
Ⅱ．分布調査の概要…… 1
Ⅲ．主要遺跡の概要…… 3
　1．松井横穴群…… 3
　2．松井窯跡群…… 6
　3．大住車塚・南塚古墳…… 8
　4．堀切古墳群…… 9
　5．興戸遺跡……12
　6．興戸廃寺……14
　7．田辺城跡……16
　8．興戸古墳群……16
　9．興戸宮ノ前窯跡……18
　10．飯岡古墳群……21
　11．田辺天神山遺跡……23
　12．三山木廃寺……25
　13．同志社田辺校地内の窯跡……29
　14．下司古墳群……31
　15．普賢寺跡……32
　16．小田垣内遺跡……35
　17．シオ古墳群……35
　18．天王畑（普賢寺）城跡……36
Ⅳ．諸遺跡出土の遺物……36

図　版　目　次

図版第１　興戸２号墳付近出土碧玉製腕飾類
図版第２　堀切７号墳出土人物埴輪
図版第３　普賢寺跡出土軒丸瓦
図版第４　普賢寺跡出土軒平瓦（上）と興戸廃寺出土瓦類
図版第５　三山木廃寺出土瓦類

挿　図　目　次

第１図　分布調査採集土器実測図……１
第２図　主要遺跡位置図……２
第３図　松井３号横穴開口部……３
第４図　松井４号横穴内部……３
第５図　松井横穴群実測図１……４
第６図　松井横穴群実測図２……５
第７図　松井横穴出土遺物実測図……６
第８図　大住車塚・南塚古墳（手前南塚古墳、南西から）……８
第９図　大住車塚・南塚古墳地形図……９
第10図　堀切古墳群分布図……10
第11図　堀切古墳群調査状況……11
第12図　堀切古墳群調査地全景……11
第13図　興戸遺跡出土遺物実測図……13
第14図　興戸廃寺周辺遠景（南から）……14
第15図　興戸廃寺出土瓦実測図……15
第16図　田辺城跡見取り図……16
第17図　興戸２号墳付近出土家形埴輪……16
第18図　興戸１・２号墳地形図……折込み
第19図　興戸２号墳付近出土碧玉製腕飾類実測図……17
第20図　興戸宮ノ前窯跡出土須恵器実測図……19
第21図　飯岡古墳群分布図……21
第22図　飯岡丘陵遠景（南東から）……21
第23図　飯岡車塚古墳地形図……22
第24図　ゴロゴロ山古墳地形図……22

第25図　トヅカ古墳出土鏡……22
第26図　田辺天神山遺跡遠景（南から）……24
第27図　田辺天神山遺跡遺構配置図……24
第28図　三山木廃寺周辺近景……26
第29図　三山木廃寺出土軒丸瓦実測図……27
第30図　三山木廃寺出土軒平瓦実測図……28
第31図　まむし谷窯跡（上：窯天井部崩落状況、中：須恵器出土状況、
下：窯の床面）……30
第32図　新宗谷窯跡採集須恵器片……30
第33図　下司１号墳石室……31
第34図　普賢寺跡（大御堂観音寺）遠景……32
第35図　普賢寺跡塔心礎……32
第36図　普賢寺跡出土瓦実測図……33
第37図　小田垣内遺跡遠景（手前田宮館、北から）……35
第38図　小田垣内遺跡見取り図……35
第39図　シオ１号墳……35
第40図　シオ１号墳石室内部……35
第41図　天王畑（普賢寺）城跡見取り図……36
第42図　高ケ峯遺跡出土サヌカイト製石核……36
第43図　山崎遺跡出土遺物（左：石棒、右：異形石器）……37
第44図　山崎神社所蔵遺物実測図……37
第45図　狼谷遺跡出土弥生土器……38
第46図　狼谷遺跡出土石器（上：石包丁、下：左・柱状石斧、右・環状石斧）……38
第47図　内山古墳出土須恵器実測図……39
第48図　大欠古墳出土土器実測図……39
第49図　大欠古墳出土遺物（上：須恵器・瓦器、下：鉄刀）……39
第50図　田辺遺跡出土土器実測図……40
付地図　田辺町遺跡分布地図

付　表　目　次

付表１　田辺町遺跡一覧表……42
付表２　田辺町埋蔵文化財関係文献一覧表……50

Ⅰ．はじめに

田辺町では、ここ10数年来宅地開発が進み、人口が約２倍になっている。たとえば、府営田辺団地をはじめとして大住ケ丘（大住地域）・松井ケ丘（同）・健康ケ丘（同）等、町北部を中心として宅地化が進められている。今後においては、町北部のみならず町南部においても2,000戸級の宅地開発・文化学術研究都市構想等の計画がなされている。また国道24号線バイパス・国道307号線バイパス・町道（新設道路）等の建設も計画されている。

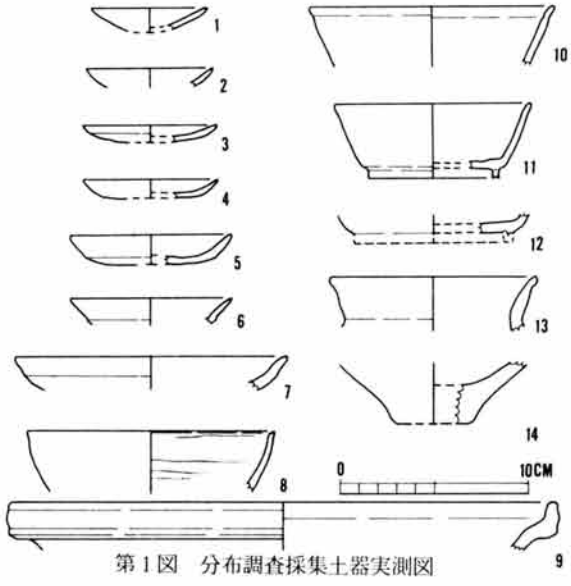
以上のように、本町において土木工事等が目白押しにせまり、埋蔵文化財破壊の危機に直面している現状の中で、昭和56年度に遺跡の詳細分布調査を実施することになった。また、この調査の実施によって遺跡台帳を整備することができ、今後の土木工事等にそなえ、埋蔵文化財の保存および保護をはかっていく上で基礎資料とすることができることとなった。　（西川英弘）

Ⅱ．分布調査の概要

今回の分布調査は、既に詳細な分布調査のなされている三山木・普賢寺地区の同志社校地内、南田辺団地開発予定地内、松井地区の京阪東ローズタウン開発予定地内を除く町内全域を対象としたものであり、『京都府遺跡地図』等にもとづく周知の遺跡の位置の確認・現状の把握および新しい遺跡の発見に努めた。しかし、実際に分布調査を行っていく過程で種々の問題点、時間的制約等が生じ、大阪府との府境付近の丘陵地帯は未踏査区域として残ることになった。また天王・高船・打田の各地区は、各々一部分しか踏査できなかった。これらの諸区域については、後日機会をみて踏査していきたい。

分布調査は、まず北部の平野部からはじめ、徐々に南下し、普賢寺谷にはいり、次に丘陵地帯を同じように北部から踏査した。踏査に際しては、2,500分の１の地図を持ち歩き、随時遺跡の記入を行った。踏査期間は、稲刈りの終了した昭和56年11月16日～昭和57年１月19日までで、その後報告書作成にとりかかった。また、期間中、興戸古墳群内の１号墳（前方後円墳）と過去に調査されている２号墳の地形測量を行った。

なお、第１図は、今回の分布調査で採集した遺物の一部である。弥生土器・土師器・須恵器・瓦器などがある。１～７は土師器の皿、８は瓦器椀、９は中世の須恵器鉢、10～12は須恵器の杯、13・14は弥生土器である。土器片個々の採集地点は、１が遺跡台帳（町番号）131番、２が146番、３が78番、



第１図　分布調査採集土器実測図

4・5が81番、6が137番、7・10が136番、8が150番、9が126番、11・14が88番、12が156番、13が24番に該当する。

（鷹野一太郎）

第2図　主要遺跡位置図（番号は第Ⅲ項の遺跡番号と一致する）

Ⅲ. 主要遺跡の概要

1. 松井横穴群

田辺町薪から八幡市美濃山にかけての丘陵には、丘陵斜面を掘り込んで墓室とした、横穴と呼ばれる古墳が数多く見られる。なかでも、田辺町松井の集落の裏山には、かつて19基の横穴が開口していた事が知られており、田辺町内では最も横穴の分布が濃密な地域である。

この松井横穴群[(1)]は、天神社の鎮座する丘陵を南に下った東斜面を中心に、現在9基が開口している。もっとも、この地域の丘陵は洪積層であり、崩落しやすい砂礫土を基盤としているから、開口している9基の横穴も完全なものは無い。加えて、竹藪の土入れによって毎年地形が大きく変わる事を思えば、往時にはこれに数倍する横穴が群集していたのであろう。

現在開口している9基の横穴は、1～6号横穴が一群を成し、残りの7～9号横穴は低い尾根を界して別の一群を形成している。9基の横穴のうち、8・9号横穴(西北西開口)を別にすればいずれも東に開口するが、とくに1～6号横穴は1～2mの間隔で並んでおり、南山城地域でも他にみられない分布密度を示している。

それぞれの横穴の概略を以下に記す。

1号横穴　現存長約4.2m。玄室内の崩落が特にひどく、奥壁は旧形を残していない。断面はアーチ形。

2号横穴　現存長約3.2m。「コ」の字形の平面で、断面はアーチ形。

3号横穴　現存長約2.4m。逆台形の平面で、奥壁がドーム状にせり出す。断面はアーチ形。

4号横穴　現存長約2.9m。玄室の左側壁が旧形を残しているなら、逆台形の平面となる。断面はアーチ形。

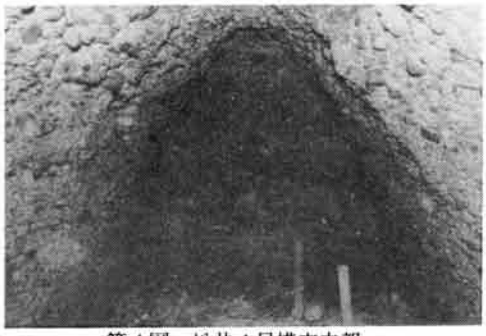
5号横穴　現存長約4.2m。玄室と羨道との境が明瞭なもので、玄室は長方形。断面は中央部の高いアーチ形。

6号横穴　現存長約4.2m。玄室と羨道との区別が不明確で、とっくり形とも「コ」の字形ともつかない不定形な平面。断面はアーチ形。

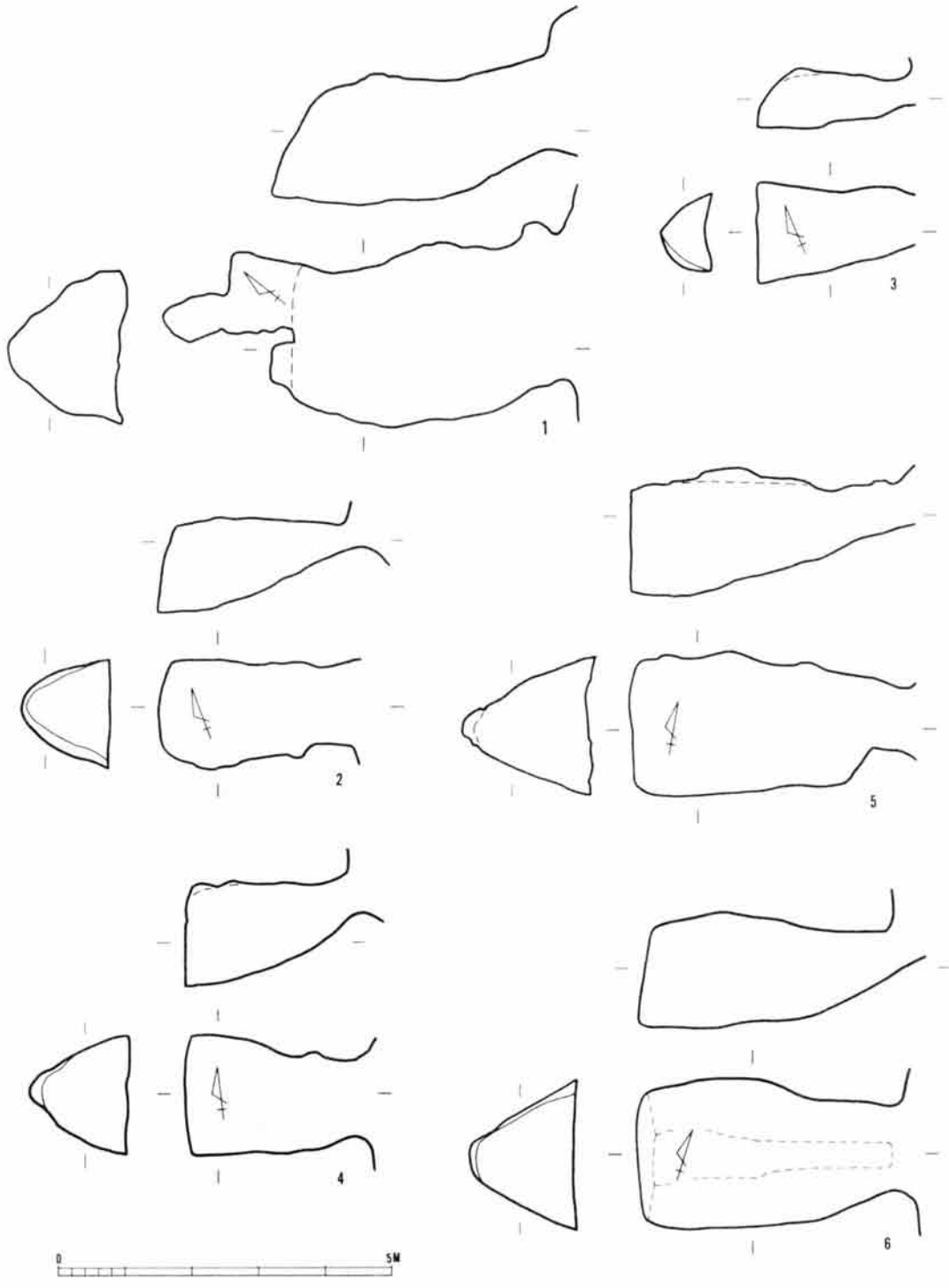
7号横穴　現存長約3.9m。「コ」の字形の平面で、断面はアーチ形。

8号横穴　現存長約2.8m。玄室内の堆積土が著しい。「コ」の字形の平面で、断面はアーチ形。

第3図　松井3号横穴開口部



第4図　松井4号横穴内部



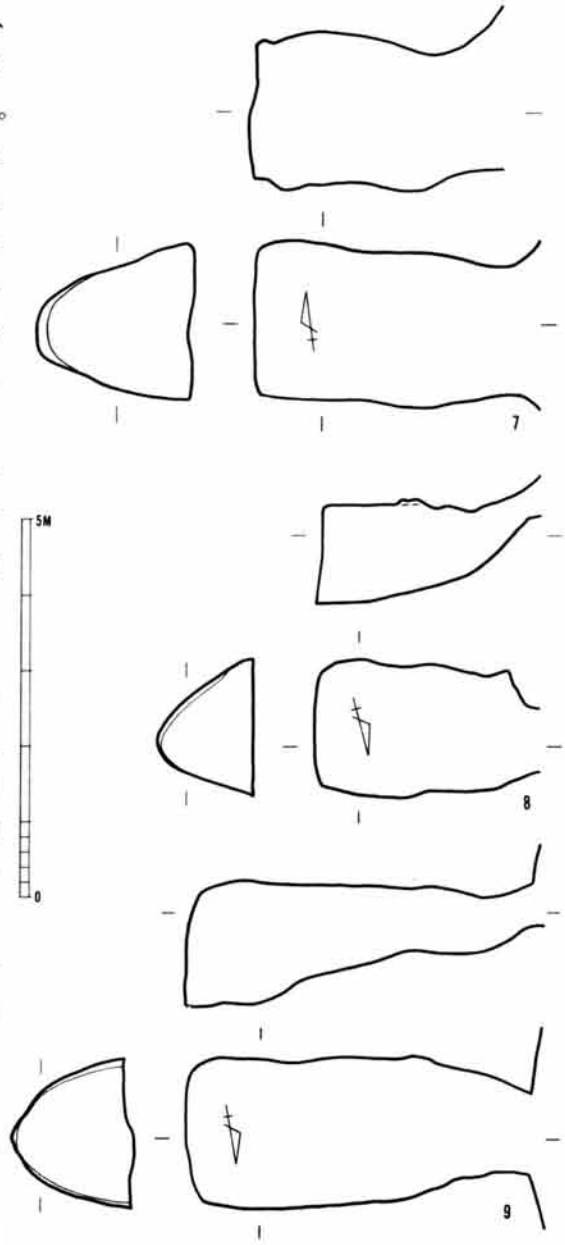
第5図　松井横穴群実測図1

9号横穴　現存長約4.6 m。玄室と羨道の境が崩れ、とっくり形の平面になっている。断面はアーチ形。

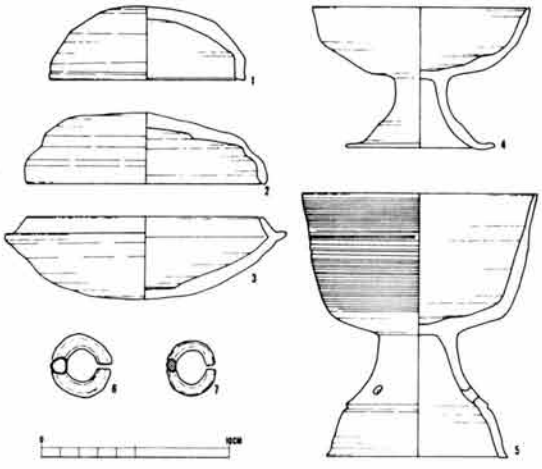
開口する9基の横穴は、壁面や天井部の崩落がひどく、しかも開口部から流入した土砂によって床面が深く埋もれている。また多くは、過去の土入れ等によって羨道部のほとんどが崩されているから、正確な規模や特徴を記すことは難しい。しかし、ほぼ9基に共通する点をあげれば、玄室と羨道との区別が不明確な長台形の平面形に、直立する奥壁と断面アーチ状の天井構造をもつことなどが挙げられる。恐らく築造当初は、5号横穴のように多くが長方形の玄室に羨道部を作り付けた構造の横穴であったろう。

ところで、この松井横穴群から出土した遺物が伝えられている。どの横穴から出土したものかは判らないが、須恵器高杯1(4)・脚付椀1(5)・杯身1(3)・杯蓋1(2)・壺蓋1(1)・金環は中空(6)と中実(7)のもの各1がある。須恵器は陶邑編年のTK209型式に相当するから、実年代ではおおよそ6世紀後半それも末葉と考えられ、松井横穴群の造営年代の一点をおさえることができる。おそらく松井横穴群はこの時期を前後とする比較的短期間のうちに造営が行われたと考えられる。

古墳時代の後期、それも6世紀後半になると、丘陵の限られた面積を占めて多くの古墳が造営される。群集墳と呼ばれるこれらの古墳は、南山城の場合、顕著な例は少ない。むしろ木津川に注ぎ込む小河川の流域毎に、横穴式石室を内部主体とする古墳が10基程度の群を構成するのが常である。もちろんこれらも小規模な群集墳として考えるべきであるが、いずれも約半世紀の間に順次築造された可能性が強く、他地域とはやや異なった様相を呈している。ところが、松井横穴群と美濃山[(2)]・荒坂[(3)]・女谷[(4)]の横穴群は相近接し、しかも共通の墓制であるなど本来一つのグループとしてとらえる事ができる。これらの横穴群は6世紀後半か



第6図　松井横穴群実測図2



第７図　松井横穴出土遺物実測図

ら７世紀初頭にかけて造営され、現在確認されているものだけでも約40基にも及ぶ。とすると、この松井・美濃山・荒坂・女谷の横穴群は南山城でもまれな後期群集墳といえよう。

『和名抄』によれば、上記の横穴の分布する地域は、山城国綴喜郡大住郷と有智郷に比定され、大住郷については奈良時代隼人の居住地となっている。(5) 一方、畿内に移配された隼人の故地である南九州には、地下式横穴・地下式板石積石室・立石土壙などの特色ある墓制が見られ、とくに肥後・日向南部は横穴の分布が稠密な地域として知られている。(6)

このことから、松井・美濃山・荒坂・女谷の横穴群を隼人集団の墳墓とみる説がある。(7) もともと横穴は、横穴式石室に比べて、造営される土地の基盤層に左右される事が多いといわれる。ところが、横穴の分布する当地域は、横穴の掘削には全く適さない砂礫土を基盤層としている。考古学の立場からは、この地域の横穴が地形や地質によって生み出された墓制と考えるよりも、横穴を墓制とする集団がもたらしたと考えるのが妥当である。文献に記された隼人集団の畿内移配が古墳時代後期にまで遡りうるかどうかについては今後さらに検討を重ねる必要があろう。しかし、当地域の横穴群が南九州系の隼人の墳墓であるとみる考古学の立場からの見解は、ある程度の説得力をもつものと言えよう。

（海老瀬敏正）

（注）

(1)　付表２文献一覧表番号３・５・25・50・51・61

(2)　佐藤虎雄「美濃山の横穴」（『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告書』第10巻　昭和４年）

(3)　京都大学文学部考古学資料目録第２部（昭和43年）

(4)　高橋美久二「女谷横穴について」（『京都考古』第２号　昭和49年）

(5)　西田直二郎『洛南大住村史』（昭和26年）

(6)　池上悟『横穴墓』（昭和55年）

(7)　森浩一「近畿地方の隼人―とくに考古学の視点から」（『隼人』　昭和50年）

２．松　井　窯　跡　群

１　はじめに

松井窯跡群と呼んでいる遺跡は、田辺町松井の山林の中にある、奈良時代末から平安時代初期にかけての、須恵器の窯跡のことである。遺跡の位置は、国鉄片町線の長尾駅と大住駅のほぼ中間の北側に広がる広大な山の中で、海抜80～90ｍの丘陵の南向き斜面である。北側は八幡市と接し、西側及び南側は大阪府枚方市と接している、府県境である。歴史的には、６世紀以来、南九

州の隼人が移住した所であり、継体天皇やワニ氏の伝承が多く伝えられている。また平安初期、桓武天皇の交野ケ原遊猟の地でもあり、中世から近世に至るまでの史跡や伝承も多い。

2　調査に至る経過

この山林中に古窯跡が眠っていることを発見し、発掘調査をするに至ったきっかけは、この山林を京阪電鉄が買収し、「京阪東ローズタウン」を建設する計画があったからである。この計画は八幡市側では「美濃山地区」に約60ヘクタール、田辺町「松井地区」に約93ヘクタールの広さで、八幡市側ではすでに昭和54年に奈良時代の須恵器窯を発見し、発掘調査を行っていた。田辺町側においても昭和55年４月に分布調査を行い、須恵器窯や工房跡とみられる遺跡を発見し、８月以降昭和57年１月まで、２次にわたって発掘調査を行った。

従来、この山林中は埋蔵文化財の調査は行われていなかったが、最近、大阪府から京都府にまたがる男山丘陵でいくつかの窯跡が発見され、発掘調査が行われるようになってきて、今まで空白であったこの時期の窯業生産遺跡が明らかになり、重要視されてきた。

3　遺　・　構

調査した窯跡は、南向きの丘陵斜面に３基以上並んでいたもので、そのうち１号窯は最も残りが良く、長さ８ｍ、巾２ｍで約30°の傾斜をもち、その下方には莫大な量の遺物を混入した灰原も広がっていた。窯は傾斜した地山に掘り込んで作ったもので、焚き口は一段深くなって炭が堆積し、窯壁が左右に広げられて堆積していた。窯内に残っていた遺物は奈良時代末から平安時代初期の須恵器である。

灰原は１号窯の南側に、西北から東南の方向に延びている丘陵の裾部で、須恵器の混入した灰混り土があったのでこれを追いながら丘陵の土を掘っていったところ、元の地形は南北方向のＶ字形の谷で、この谷に炭、灰、焼土などと共に須恵器の破損品を捨てたもので、灰原の厚さは約２ｍあった。全体に北から南へゆるやかに傾斜して堆積し、大きく上下２層に分かれていることがわかった。堆積の巾は５～９ｍで、長さは15ｍぐらいになると推定できる。灰原の下の地山は褐色砂質土の部分と粘土の部分があり、粘土は褐色粘土と、青灰色粘土の部分があって、後者は須恵器の原料として採掘したものと思われる。

窯及び灰原の他に、この丘陵の尾根には、付近の土砂を運んでマウンドにした部分がいくつかあり、マウンドの中にも多量の須恵器が混入している。

4　出 土 遺 物

窯及び灰原から出土する遺物は須恵器、土師器、瓦で、須恵器は壷、甕、鉢、杯、皿、硯が大部分を占め、土馬が１点だけ出土した。

土師器は甕が多く、脚部を面取りした高杯が１点だけ出土した。これらは窯の周辺からも、灰原の炭層中からも出土しており、窯業生産とどのような関連をもつものなのか問題点となる遺物

である。

瓦は布目瓦の小片であるが3点出土しており、窯内での台に使用されたのではないかと考えられる。

5 結　　び

今回の調査によって、男山丘陵における、奈良末平安初期に至る、律令時代の窯業生産遺跡が明らかとなり、学術上の意義が大きい。

またこの窯跡の実年代としては、浄瓶及び面取り高杯の出土によって、先の八幡市交野ケ原窯跡群よりも若干新しい様相をもつものであることがより一層確実となった。今後は需要地を研究することがこの窯跡群研究の一つの課題でもある。　　（江谷　寛）

3．大住車塚・南塚古墳

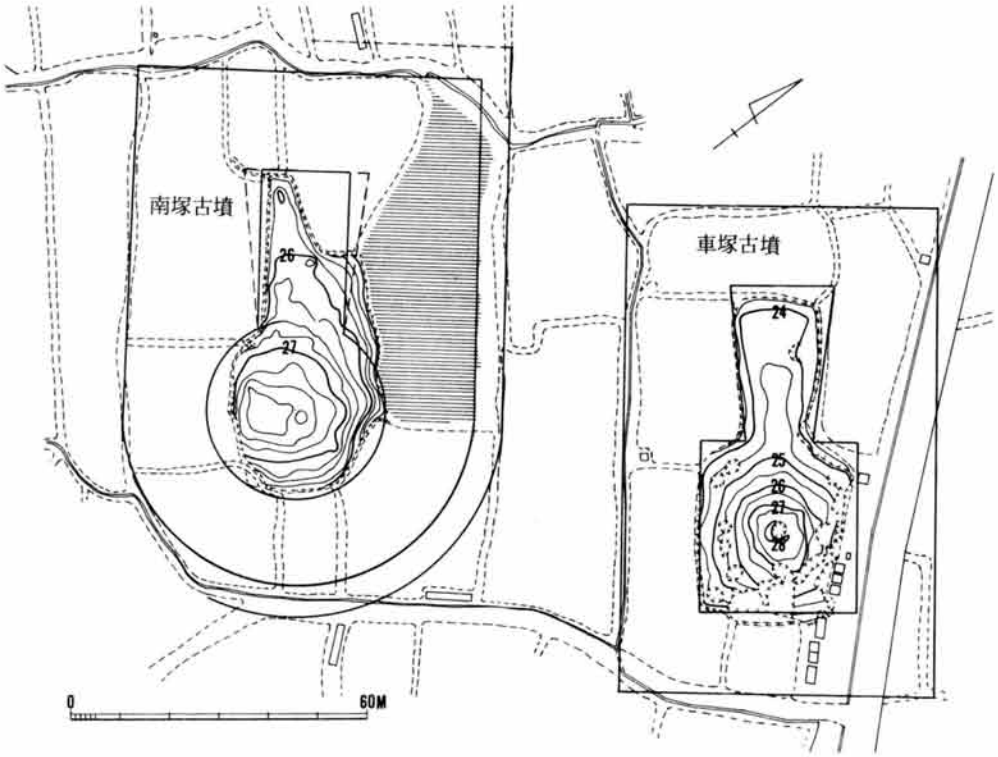
東林・岡村両集落の中間、低台地上に前方後円墳と前方後方墳とが並んで存在する。府道のすぐ西の低い側にあるのが前方後方墳車塚古墳（チコンジ山古墳）で、その西の高い側が前方後円墳南塚古墳である。

第8図　大住車塚・南塚古墳(手前南塚古墳、南西から)

車塚古墳[8]は、西北に面した前方後方墳で、全長約66m、前方部幅約18m・同高さ約1.5m、後方部一辺約30m・同高さ約4.5mの規模をもつ。周囲の水田畦畔から周濠の存在が考えられる。周濠は、平面形が長方形であり、その幅は後方部後方・前方部前面で約15m、後方部側面で約13mを測る。埴輪の存在は確かめられていないが、葺石は認められる。主体部については、未発掘のため詳細不明であるが、竪穴式石室ないし粘土槨が考えられる。

南塚古墳[9]は、西北面した前方後円墳で、車塚古墳と方向は一致している。墳丘は、茶園・果樹園として開懇され、原形をかなり損っているが、全長約65m、後円部径約36mを測ることができ、前方部幅については不明確であり、くびれ部で約17.5m、先端で18mないし25mと考えられる。墳丘の高さは現在、後円部約3m、前方部約1.5mであるが、本来はもう少し高かったと推定される。墳丘の周囲には同一水面の盾形周濠を有し、その幅は、前方部前面・後円部後方で約19m、後円部側面で約17mを測る。同一水面にするために地形の低い北側には、幅約6mの外堤を築いている。また、この北側周濠の一部は、現在も溜池として利用されている。埴輪については、車塚古墳同様不明で、墳丘上の各所に葺石らしき河原石が認められる。主体部は、竪穴式石室であったが、明治年間に破壊された。その時、石製品・刀剣が出土したことが伝わっている。

なお、前方部西方に、南塚古墳の周濠外線もしくは外堤上に築かれた陪塚と思われる、キンリンサン古墳の残痕がある。また、車塚・南塚両古墳の南東100m付近、水田中に松の木1本が生



第９図　大住車塚・南塚古墳地形図　（拠『南山城の前方後円墳』）

えた土盛りがある。これが、姫塚と呼ばれる古墳の残欠で、車塚・南塚どちらかの陪塚と思われる。

車塚・南塚両古墳の築造年代に関しては、南塚古墳が、墳丘形態・盾形周濠・竪穴式石室・石製品などから、古墳時代中期初頭、５世紀前葉を中心とする頃の築造と考えられ、車塚古墳は、南塚古墳より一段低いところに築かれかつ南塚古墳の外堤より水田一枚隔てて周濠が存在することなどより、南塚古墳より若干遅れて築かれたものと考えられる。

なお、車塚古墳は、昭和49年に国の史跡指定を受け、永久に保存されることになっている。

（鷹野一太郎）

（注）

(8)　付表２文献一覧表番号８・18・25・42

(9)　付表２文献一覧表番号８・25・43

４．堀切古墳群

西薪集落の西方に位置する堀切古墳群[10]は、すでに田辺町郷土史古代篇や田辺町史に記載されている。

甘南備山の山麓に広がる南から北に延びる標高75ｍ前後の洪積層の二つの丘陵端にあるこの古

第10図　堀切古墳群分布図

墳群は、稜線上に造られた高塚古墳と丘陵斜面に掘穿された横穴の二つのグループから構成されており、丘陵上の古墳6基と横穴9基が京都府遺跡地図に登録されている。

この丘陵の一つが薪小学校建設用地にあてられたため、昭和53年11月より府文化財保護課の指導のもとに町教育委員会により発掘調査が実施された。

調査の対象となった丘陵は稜線を境にして東を堀切谷・西を大欠谷と呼ばれている所で、建設用地内には、円墳1基（4号墳）と横穴7基（3号～9号）が府遺跡地図に登録されている。このうち、横穴2基（5・6号）は昭和44年に竹林の土入れ用の土取り作業中に発見され、府文化財保護課により調査された。5号横穴は、副葬品として須恵器の杯身2個、土師器杯1個の3個の土器のみであった。又、6号横穴は、とっくり形の平面形で、天井の構造は残存部よりかまぼこ形に丸くして作られていたと考えられる。床面は木炭を敷きその上に礫を敷いている。中より凝灰岩製の組合式家形石棺が検出され、人骨一体分が保存されていた。副葬品は、金環一対・刀子1、棺外から須恵器の広口壷・高杯脚破片・有蓋高杯脚部・杯蓋の4個が出土している。この二基の横穴の構造・遺物・家形石棺などから古墳時代後期後半の7世紀前半までに築造された古墳として記録されている。

発掘前のこの丘陵の状況は、稜線部及び西斜面は松や雑木に、東斜面裾は竹林に覆われていた。竹林の土入れのための土取りのため丘陵のあちこちが削られ絶壁になっている。以前はこの丘陵の幅ももっと広かったようであるが、水害や大正初期の砂防工事などにより現在のような痩尾根になったと聞く。このため墳丘も流れたり、削られたりしているため盛土もほとんどなく原形を留めていない。

＜丘陵上の古墳＞

稜線上の調査古墳は4基で、4号墳以外は新しく発見されたものであり、北から7・8・9号墳とした。

4号墳は標高約76mに位置し、墳丘はやや盛り上がりをみせ、石材2個が露出していた。内部はすでに荒され、石室の石材も運びさられ、わずかに露出していた1個が基底石として築造時の状態を保っている。破壊が激しく内部の状態もよくわからないが、現状からすると、横穴式石室を内部主体とする直径約20mの円墳と考えられる。石室はほぼ南北方向で地山を掘り込み、その土を墳丘の盛土に使用している。

7号墳は4号墳の南に接し、標高75mで墳丘の⅔はすでに削られてしまっており、主体部も不明である。又、盛土もほとんどなくなっている。南西・北東部で墳丘裾の溝が確認でき、これからすると、直径約15mの円墳が想定できる。この溝より出土した遺物により外部施設の様子が知られる。それによると、人物埴輪3個体（須恵質2、土師質1）・馬埴輪1個体・器財埴輪1個体

・円筒埴輪数個体・器台である。人物埴輪の土師質のものは、胴部分で首に丸玉の頸飾りを付けており、須恵質の1体は女人像で胴より上部が出土している。他は頭に被り物をつけ、腰に刀子と皮袋をつけた武人像である。そして、被り物の一部と鼻の部分にかなり意識して直弧文がつけられている。

9号墳は標高77mに位置し、内部主体は南西に開口する横穴式石室であるが、羨道部の3個の側石を残し、石材はすでにぬきとられていた。床面には礫が敷かれ、赤色顔料が付着していた。又、板状の石材片が数片でていることから、箱式石棺が安置されていたと考えられる。床面からは須恵器（杯・高杯)・銀環・ガラス玉・鉄刀などが出土している。

＜丘陵斜面の古墳（横穴)＞

横穴群は丘陵東斜面の標高65m前後の所に位置している。すでに開口している4号横穴より南にほぼ等間隔に4基発見され、北から7・8・9・10号横穴とした。

7号横穴は天井部はおちているため高さは不明である。幅約1.5m、残存する奥行は約2.1mで羨道に行くに従い幅は狭くなっている。床面には長径50～60cmの棺台の石が3個残っていた。遺物は土師器壷片のみであった。

8号横穴はとっくり形の平面をもち、玄室の奥壁は1m、奥行は約2m、天井までの高さは残存部分で約90cmである。遺物は羨道部よりに須恵器の杯（蓋・身）6・高杯1・平瓶1である。

第11図　堀切古墳群調査状況

9号横穴も天井部は陥没している。とっくり形の平面をもち、玄室の奥壁幅は約1.5m、奥行約2.5mの胴ふくらみの形をしている。出土遺物は須恵器杯・壷である。

10号横穴も天井部は落ち高さは不明である。玄室の奥壁幅約1.6m、奥行2.5mで床面はとっくり形の平面である。玄室から羨道部にかけて釘が多く検出され、玄室内から長径約20cmの赤色顔料の付着した棺台と思われる石が1個検出され、木棺埋葬であったことがわかる。さらに玄室の奥壁北よりに並んで頭骨2体、腕・脚の骨などが出土し、骨の出土位置からして追葬による改葬とも考えられる。出土遺物は中央より北側に多く、須恵器杯(蓋・身）6・高杯2・土師器壷・有頸壷各1・銙帯金具・鉄片・釘などの遺物が出土している。

第12図　堀切古墳群調査地全景

（林　正）

（注）(10)　付表2文献一覧表番号25・35・59

5．興 戸 遺 跡

京都府立山城園芸研究所付近一帯は、興戸遺跡[11]と呼ばれ、弥生時代以降各時期の遺物の散布がみられる。昭和50年7月、田辺中学校内の発掘調査では、明確な遺構の検出はなかったものの、土師器・須恵器・埴輪・玉類が発見され、なかでも須恵器には5世紀代に属すると思われるものがある。その後、昭和54年7～8月に園芸研究所内の発掘調査が行われ、掘立柱建物跡5棟、竪穴住居跡2基、溝6条が検出された。掘立柱建物のうち4棟は、方形掘方をもち、方位を等しくし規格性が認められる。倉庫と考えられる総柱建物もあり、奈良時代に所属するものと推定される。他の1棟は、平安時代のものと考えられる。竪穴住居と溝の多くは古墳時代後期のものである。出土遺物には、弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器がある。弥生土器は、中期中葉～後期前半あたりまでのものが出土し、後期初頭頃に属する伊勢湾系の壷も含まれている。

第13図は、発掘調査以外でこれまでに採集された土器などである。弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・青磁・白磁・瓦器・円筒埴輪などがある。

須恵器（1～12）　杯蓋・杯身・壷・甕・鉢などがある。1～3は古式の杯蓋と身である。4は杯か高杯とみられるもの、5は奈良時代の高台をもつ杯身。6～8は平安時代の瓶子。9は壷の高台部分。10は広口壷の口縁部。11は甕で、肩部にカキメがある。12は10世紀に属する鉢である。

土師器（13～20）　壷・甕・高杯・皿がある。13・15・16は船橋O—Ⅱ型式に属するもの。13は直口壷で、球形の体部をもち、その下半部に焼成後の穿孔がある。15・16は高杯で、大きく広がる口縁部をもち、脚部内面にヘラケズリがみられる。14は甕でほぼ全面にハケメが残る。17～20は皿である。17は外面全体をヘラケズリする9世紀のもの、18は所謂「て」字口縁をもつ10世紀のもの、19・20は内面と口縁部外面のみなで・よこなでを施す13世紀のものである。

黒色土器（21）　黒色土器Bの椀で、内面と底部を除く外面に暗文がみられる。

瓦器（22～24）　いずれも椀で、23・24は断面台形のしっかりした高台をもつ。22・23は内面の口縁端下に一条の沈線をもつ。いずれも13世紀に属する。

弥生土器（25）　壷の底部である。

円筒埴輪（26）　断面台形の低いたがをもつ。

緑釉陶器（27）　内側が一段高くなった高い貼り付け高台をもつ椀かと思われるもの。内外面に緑釉が施され、底面・高台内側に斑点状に釉が飛んでいる。須恵質。

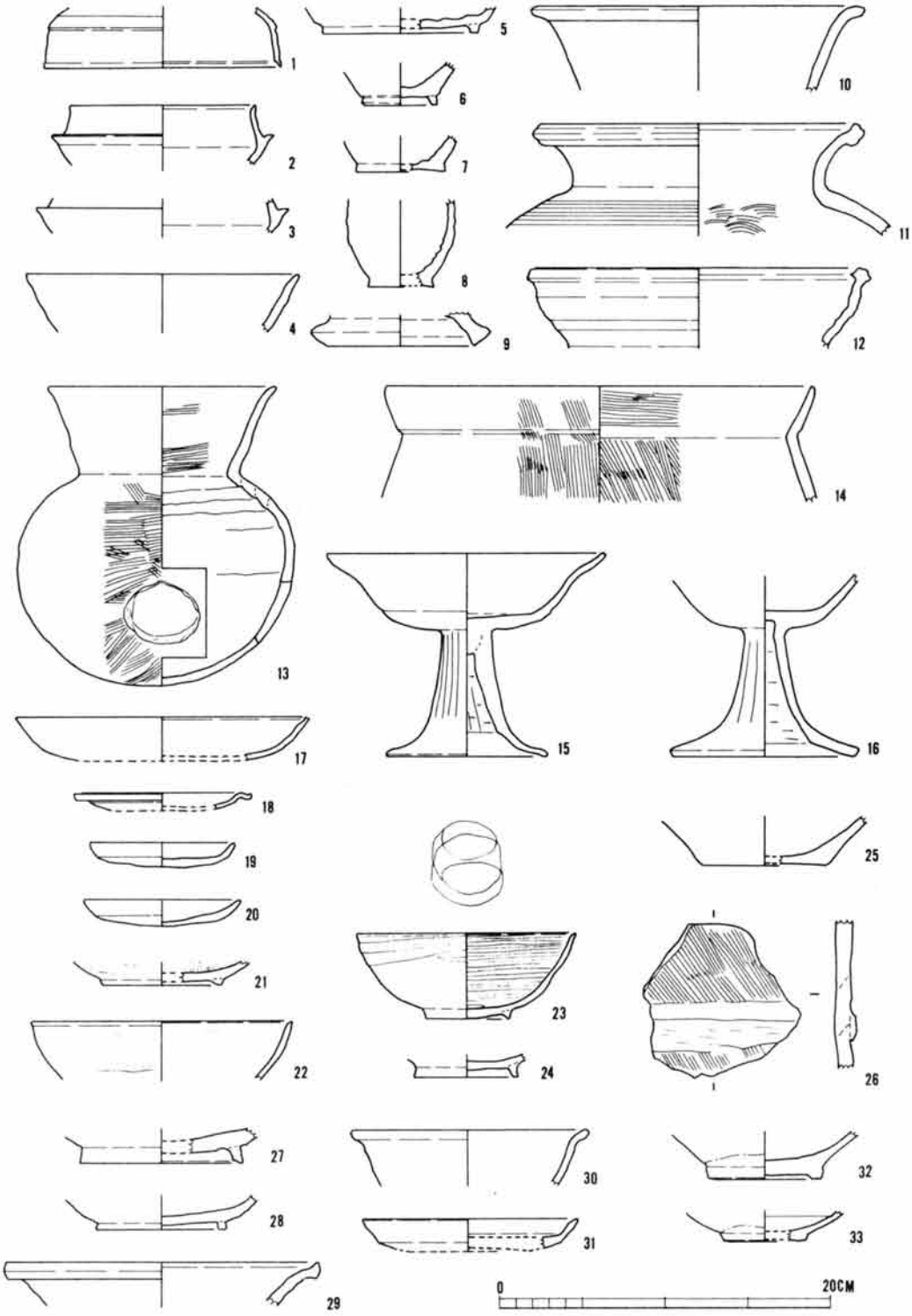
灰釉陶器（28・29）　椀（28）は貼り付け高台をもち、内面にのみガラス質の釉がみられる。折戸14号窯式に属する。29は全面にうすい釉がみられ、壷の口縁部かと思われるもの。

青磁（30・31）　中国製。椀（30）は龍泉窯系のもので、青緑色の釉がかかる。鎌倉時代。皿（31）は同安窯系のもので、見込みに猫描き文がみられ、緑灰色の釉がかかる。平安時代のもの。

白磁（32・33）　中国製。ともに椀の底部で、玉縁状の口縁部をもつ平安時代のもの。

（鷹野一太郎）

（注）(11)　付表2文献一覧表番号49・63



第13図　興戸遺跡出土遺物実測図

6．興 戸 廃 寺

興戸遺跡の中でも、特に山城園芸研究所の西部のやや高まった山裾の付近から、多くの古瓦が出土しており、寺院跡の存在が推定されている。[12] 具体的な伽藍配置等については、明らかでないが、地形・瓦の散布状況等から東面していたものとも考えられる。これまでに採集された瓦類により、奈良時代もしくは白鳳時代に創建され、鎌倉時代頃まで存続していたものと推測される。

図版第４・第15図は、興戸廃寺出土の瓦類で、１～３は軒丸瓦、４～８は軒平瓦、９は鬼瓦である。

１は単弁六葉蓮華文を内区とし、高く大きな二重の弁をもち、中房は「十」字形のくずれたもので、「丁」字形の間弁を配する高句麗系のものである。外縁は素文の直立縁。淡黄褐色を呈し軟質。直径16.7cm。つくりからみて奈良時代に属すると考えられる。２は平城宮6282系に属するもので、複弁八葉蓮華文を内区とし、外縁は線鋸歯文で飾る。表面淡褐色、断面暗灰色を呈し軟質。直径約16.5cm。３は蓮華文のくずれたもので、弁の幅に広狭みられる。圏線で囲んだ小さめの中房に小粒の蓮子を１＋５に配する。内縁は珠文が20個めぐり、外縁は素文である。淡黄褐色を呈し軟質。平安時代。山城国分寺補修瓦ＫＭ11[13]・八幡市志水廃寺軒丸瓦８[14]と同笵と思われる。

４は押し引きの三重弧文で、やや厚めの平瓦の先端・凸面に弧線をつけたもの。凹面には模骨の跡がよく残っている。淡黄白色を呈し軟質。白鳳時代。５～７は平城宮式のもので、均整唐草文を内区とする。５は6664系で、表面黒灰色を呈し軟質。６は6721系で、淡灰白色を呈し軟質。7は磨滅のためよくわからないが、灰白色を呈し軟質。８は中心飾に上下２つの三角形の珠点をもち、左右に５転する均整唐草文を内区とし、下面にのみ周縁がつく。灰白色を呈し軟質。平安時代。瓦当面右方に笵のキズがある。志水廃寺に同笵例があり、紫香楽宮・山城国分寺では、内区が全く同じで上下左右に周縁のつくものがみられる。これらの他に素文の軒平瓦かと思われる厚めの平瓦がある。

第14図　興戸廃寺周辺遠景（南から）

９は鬼瓦で火焔状の巻毛の部分かと思われる。平城宮に多くみられ、付近では正道遺跡・平川廃寺に類例がある。

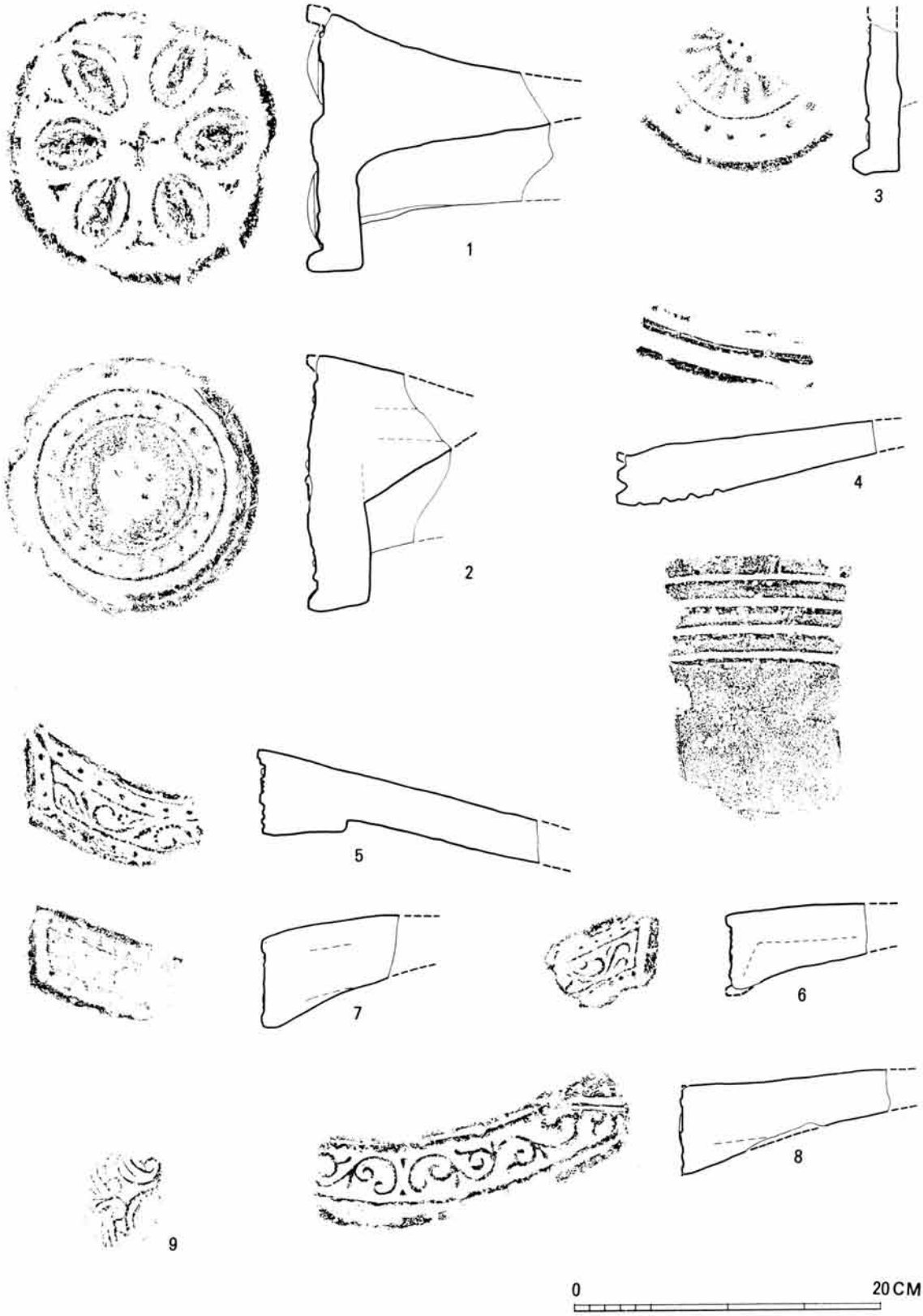
（鷹野一太郎）

（注）

(12)　付表２文献一覧表番号16・27

(13)　中谷雅治・上原真人・大槻真純「恭仁宮跡昭和53年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』1979 京都府教育委員会、昭和54年）

(14)　江谷寛『志水廃寺跡発掘調査報告』（八幡市教育委員会、昭和53年）



第15図　興戸廃寺出土瓦実測図

7．田 辺 城 跡

田辺城跡[15]は、田辺公園西側の南から北に延びる丘陵上に存在する。

第16図　田辺城跡見取り図
（提供　城郭史研究会）

丘陵頂部の南北約300ｍ、東西約40～140ｍの範囲に３ケ所の削平地を設け郭を造っている。北のものは南北40ｍ×東西45ｍ程で、中央のものは南北100ｍ×東西60ｍと広大なもので、西辺には土塁がみられる。また周囲には溝がめぐっているが、西辺中央にみられる井戸状のものとあわせ、耕作によるものかとも思える。この中央の郭と北の郭との間には、壁高最高20ｍ程の堀切が存在する。南の郭は南北45ｍ×東西80ｍのもので、周囲に一段下がった腰郭がめぐり、南側のそれは広く、階段状に作られている。この南の郭と中央の郭との間は自然の深い谷が東西両側から入いりこみ堀切の役割をなしている。また、丘陵の先端部にも小規模な削平地がみられる。

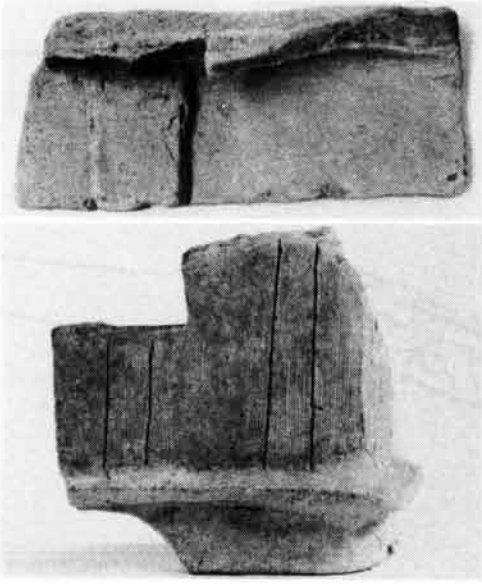
当城は、田辺氏の居城と伝えられるが、築城年代等は不明である。

（鷹野一太郎）

（注）

(15)　付表２文献一覧表番号31・68

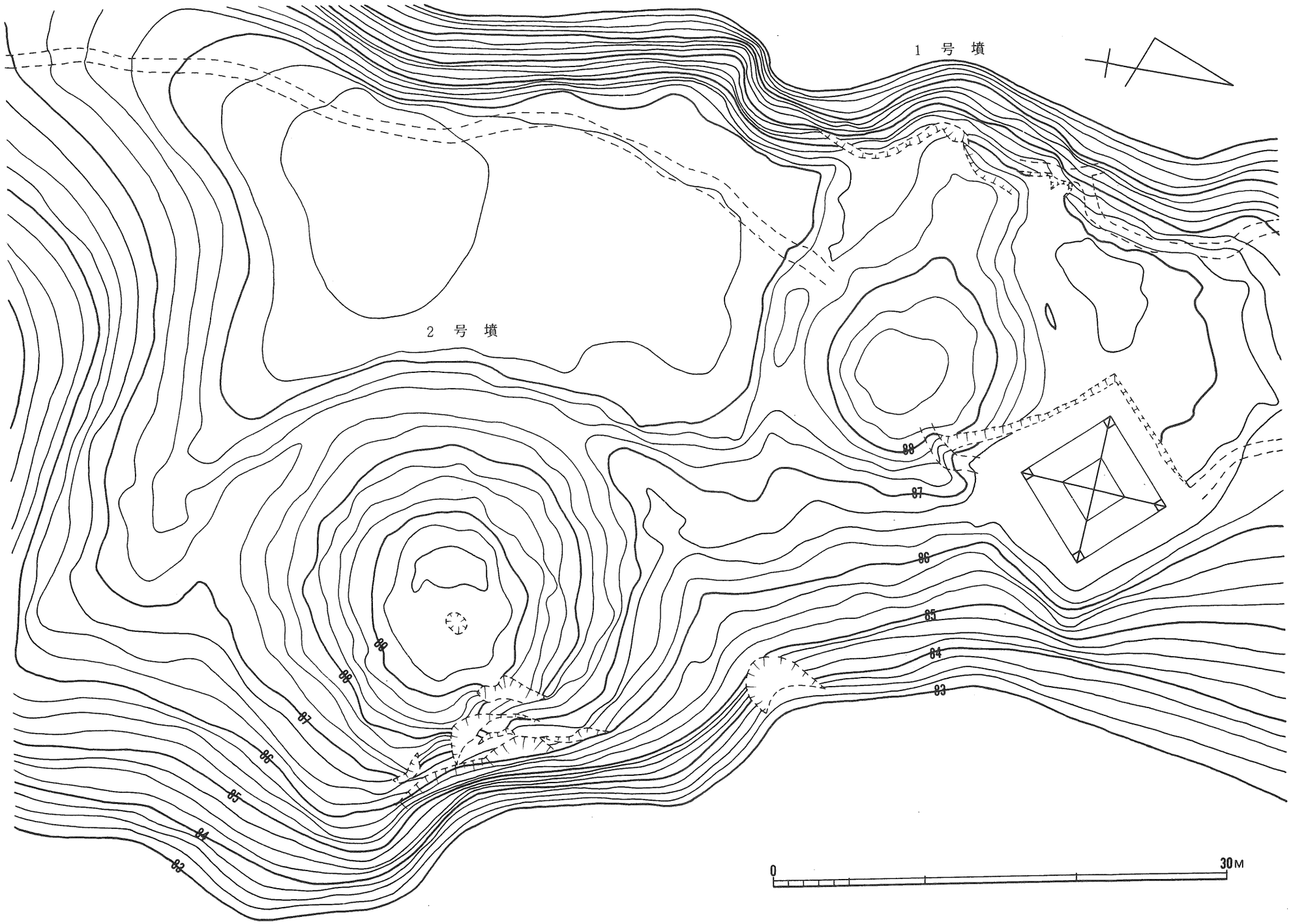
8．興 戸 古 墳 群



第17図　興戸２号墳付近出土家形埴輪

興戸遺跡西方、中央公民館の南方の丘陵地帯に分布する古墳群である[16]。興戸古墳または寿命寺古墳と呼ばれ、古くから前期古墳として著名な２号墳を中心にして、その周囲に弥生時代後期の方形台状墓や前方後円墳を含め、合計10基が存在する。

１号墳　墳頂部に三角点が設置されているところで、興戸４・５号墳発掘調査時の踏査で、前方後円墳らしいことが確認され、今回２号墳と合わせて地形測量を行った。それによれば、西面する前方後円墳であり、南北に走る丘陵頂部いっぱいに直交して築かれている。前方部端はガケとなり、後円部裾の一部は鉄塔建設により削られているが、全長約24ｍを測る。後円部は径約17ｍ・高さ1.5ｍ、前方部は高さ0.5ｍ・幅約７ｍで低く先端の



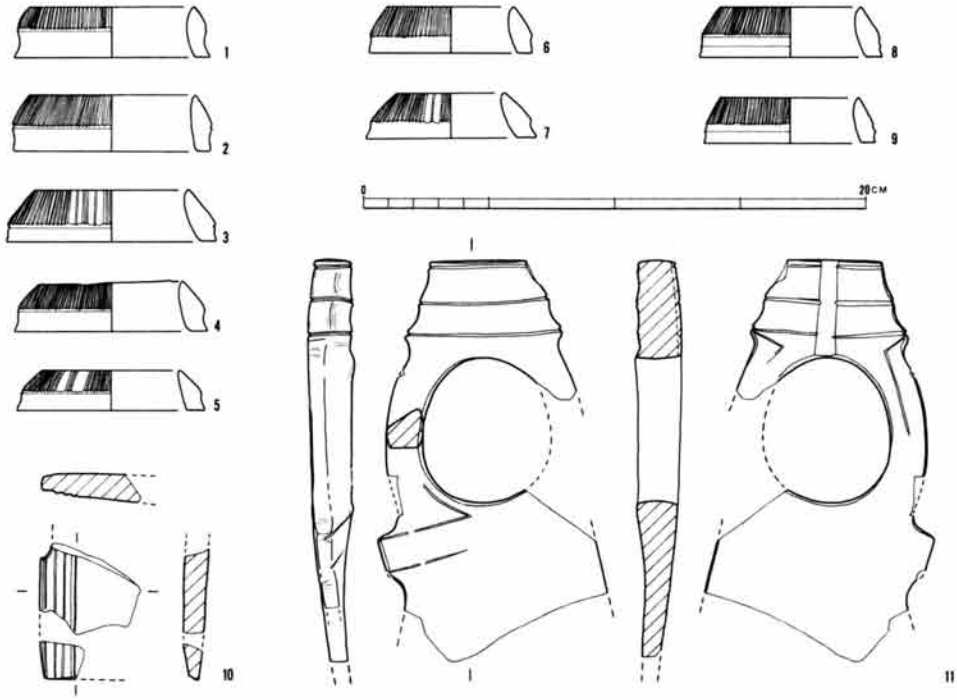
第18図　興戸１・２号墳地形図

開かないものである。墳丘の南側と北側には掘割りがみられ、ことに北側のものは墳丘にあわせた前方後円形になっている。葺石、埴輪ともにみられない。内部主体については不明であるが、三角点埋設の際に鉄刀片が出土したとのことである。

2号墳　1号墳の南東に堀を接するように存在する円墳である。径約28m、高さ約2.5mを測り、西側には幅7mの周溝が約半周している。古墳は丘陵の東端いっぱいに寄せて築かれ、堀の西側には東西幅約16mの平坦面が存在する。墳丘の東側は一部ガケとなって削られている。埴輪は円筒埴輪のほか、家形埴輪の存在が知られる。葺石については、盛土中に多くの丸石が含まれている様子で、明確にはわからない。主体部は粘土槨で、副葬品として、内行花文鏡3面以上、管玉、鍬形石、車輪石、石釧、鉄剣などがあり、碧石製腕飾類が三種ともみられ、その点数も相当数あることは注目される。

5号墳　田辺公園から酒屋神社にぬける道の西側、高圧線の下に法面が急なところがある。5号墳は、その法面の上に所在する。昭和55年に発掘調査が行われ、弥生時代後期の方形台状墓であることが確認され、現状保存されている。墳丘は、丘陵の張り出しを最大限に利用した台形状を呈し、西辺6m・東辺13.5m・南北両辺10.7m・高さ1.7mを測る。主体部は既に流出しており、全く不明である。墳丘東裾の流土層から弥生土器（V様式）の壷・甕などが発見された。壷のなかには、河内地方から運ばれたものもあり、5号墳被葬者の集団と、河内地方の集団との何らかの関係が予想される。

以上のほかは、すべて径10数m程度の円墳もしくは古墳かと思われるものである。また、前方



第19図　興戸2号墳付近出土碧玉製腕飾類実測図

後円墳（1号墳）の北側には、幅約30mの平坦面があり、何らかの遺構の存在が予想される。

図19は粟野謨氏蔵の2号墳付近出土の石釧（1～9）・鍬形石（10・11）である。石釧はすべて碧玉製で、軟質のものが多く、また殆んどのものに朱が付着している。いずれも環体傾斜面に細かな放射状凸帯があり、軟質のものの中には、放射状凸帯の間隔がところによって広くつくられているものもある(3・5・7)。放射状凸帯の直下に沈線をもつものが多いが、もたないもの（6・7・9）や、側面下段がやや直線的なもの（6)、一段の凹面のもの（1～5・7)、二段の凹面のもの（8・9）などがある。鍬形石はやはり碧玉製で、10は刃先角の部分で片面に縦の沈線をもつ。11は環部の一部と刃部を欠くもので、反りをもつ。反りの凹面は全体的にゆるい凸曲面であり、上部を3ケ所突出させ、そこに沈線を入れている。また反りの凸面は平滑に作られている。

（鷹野一太郎）

(注) ⒃ 付表2文献一覧表番号21・25・47・74・75

9. 興戸宮ノ前窯跡

1 発見と現状

所在する所は、興戸酒屋神社の北約50mで社地の北限と接している。東はゆるやかに突出した舌状地で、遠く興戸集落を望む高台に当る。立地条件として東方よりの谷風を十分に受けることのできる所で窯造りの工人の知恵を知ることができよう。以前は竹林と雑木林の混在する所であった。ここに町道の建設が行われ土砂採取場所として傾斜面を削った所、一部に灰原と須恵器片の散乱を見るに至った。この報は、「田辺の文化財を学ぶ会」会員により、吉村が現地を確認、さらに窯本体の存在も認め、町教委へ保護を依頼した。発見時の状況を述べると、露出面に、灰層、窯の炊口石らしきもの、焼けた砂岩と変形した須恵器片多数が見えた。この西傾斜面の土砂を整理すると、横幅1.3m、長さ3m以上の青灰色に焼け窯変した本体が残っており、鮮やかな青色で、天井部が落ち込んでいた。目を周囲に転ずると窯跡の北50mに渡って1m～2mの青灰色粘土層が続いており、須恵器生産の原材料であると思われる。窯は、黄褐色の洪積丘陵を切り込んで築かれて、現状では地下式穴窯[17]と言うべきであろう。

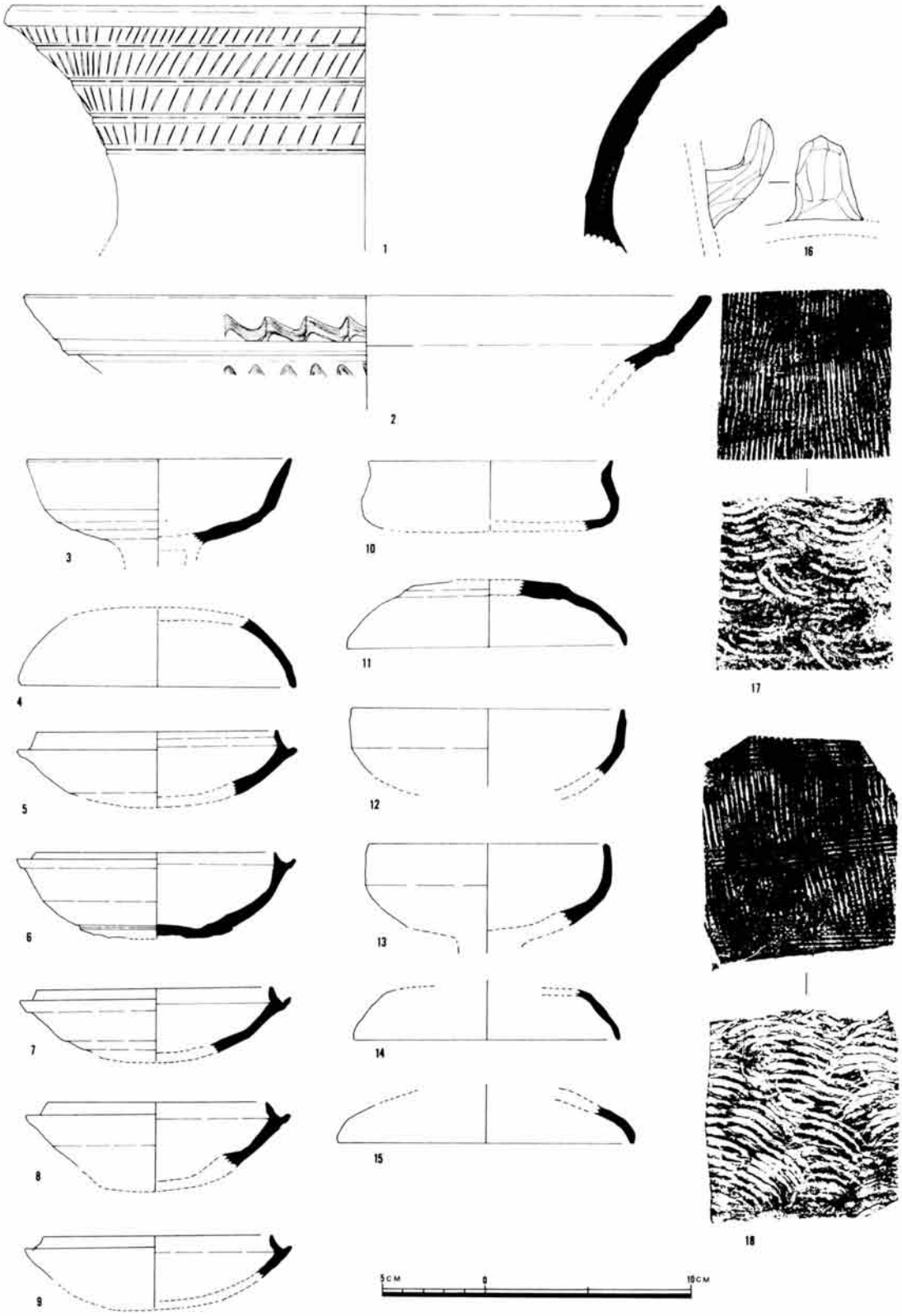
2 遺　物（第20図）

土取り場と灰原の一部より採集した量は、コンテナ2箱あり、多くは変形したものやかさね焼き、窯壁等で、観察できるものは20個ほどしかなく、器種は、甕、坩、杯、杯蓋、短頸壺、釜の耳、無蓋高杯であった。以下図に従って観察する。

甕（1）　直径35cmを計り、4段の凹線の間に退化した波状文風のもの、櫛描列点文に近い。胎土には4mm大のチャート石が入って、灰色を呈し、採集中最も整い大形である。

坩（2）　一種の壺で口縁が大きく開くものと解釈してよい。7cm大の小片を復元すると、直径が33cmになり、全面に黒びかりする釉がふき出して、口縁外面に細いハケによる波状文が2段施されている。

無蓋高杯（3・12・13）　3点の直径の平均は、12.7cmある。杯部のヘラケズリ部とヨコナデ



第20図　興戸宮ノ前窯跡出土須恵器実測図

部の境にゆるやかな段が認められる。 全体に小さな「ハゼ」現象を認めるが、胎土は緻密で堅く、うすい黒釉を見る。

杯蓋（4・11・14・15） 直径のはっきりするのは、4・11で、それぞれ13.7cmと13.6cmとで近示した数値をしめす。口縁部はうすくナデ調整され、天井部は雑なヘラケズリで、3mm大の小石と「ハゼ」が見られる。

杯（5～9） 平均した直径は、11.7cmあり高さは4.2cmある。口縁部は非常によく調整ないし成形が行われている反面、底部は簡略化されて、雑なヘラケズリとなり段状になって見える。

小形坩（10） 短頸壷とも言えるもので一点のみ発見されている。焼きはやや甘く、窯内で変形を受け底部が持ち上っている。直径は11.8cmを計する。

釜の耳（16） 軟質に焼け返っているもので、付け根より完全に剥離しているが、ヘラ成形痕がよく見られる。

17・18は、いずれも甕の腹部に施されている内外の叩き目を示したものである。

3 発見の重要性

以上の発見遺物を観察した結果、 中村浩氏の言われる「Ⅱ形式5」[18]に最も近いと思われ、氏の言う、粗雑さや省略が最高に進んだ段階であると言える。又あえて年代を与えるなら6世紀末葉より7世紀初頭[19]と考えておきたい。さて考察と若干の問題点を示しておくと、在地性に強く富んでいる点であろう。6世紀中頃より地方へ派及する[20]須恵器生産は、やはり我が町内へも進んでいたと言え、時を同じくする綴喜郡内の群集墳、横穴式石室墳や横穴墓に埋納されたと思われる。さらに薪遺跡を中心とする町内外の古墳時代集落では、生活用具として杯などが多数出土していて、一部富豪層のみの独占物ではなかったことをも示している。

7世紀と言う時代は、古代国家形成期で、中央政府は、国造制の上に一元的支配を確立しようとする律令前期で、評及び郡司制を実施しようとする時であった。これはいわゆる在地性の強い有力豪族をいかに下級官僚として位置づけ、行政組織に組み入れてゆくかが大きなカギである。評制を7世紀中葉に施行されたとすると、初頭にはその開幕を予定し、各評には有力な豪族支配が成立していたと見え、陶邑が国家の保護を受け一貫的生産を独占していた時代[21]は終り、一種の地方時代があったと考えてよい。又須恵器生産は、個別自立化と小経営の道を進むはずであったが、なお安定した経営を可能もしくは、保護したのは有力豪族であった[22]。少なくとも一郡内に供給する権利を保持する必要があったものと思われる。又興戸を中心とする三山木に至る地帯には、豪族の残した氏寺として、三山木廃寺、興戸廃寺、普賢寺（大御堂観音寺）があり、同志社校地でも二基の須恵器窯が発見され、山陽道の駅も近く、郡の中心を形成するのに十分な条件を有していると言える。最後に酒屋神社にある末社、壷神社[23]の存在する意味や、郡内群集墳との関係を明らかにすれば、地域史研究の重要性もますます増大するであろう。 （吉村正親）

（注）

(17) 従来登り窯と呼ばれたものであるが、今日、竜窯系のものを登り窯と言うので、数段の段構造を有しないので、あえて穴窯と呼ぶことにした。

(18) 中村浩『和泉陶邑窯の研究』によく分類されているものに従った。

(19) 従来の編年観の上より考えたもので、絶対的年代を示すものではない。

(20) 『陶磁大系―4、須恵』において田辺昭三氏が述べており、他の多くの報告書もこの期に地方への派及

を考えている。

(21) 中村浩著に所収されている。

(22) 吉田晶『日本古代村落史序説』に、この発展段階についてよく整理されている。

(23) 本殿の傍らにある境内末社の一つで埴山毘売を祭っている。この神は祭器酒器の材料粘土をつかさどるとされている。（付表２文献一覧表番号27）

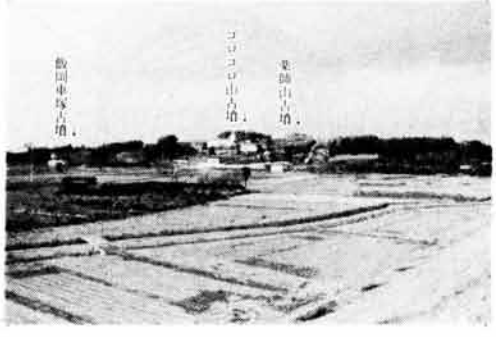
10. 飯 岡 古 墳 群

飯岡丘陵は、田辺町の東部、木津川の左岸に接して存在する独立丘陵で、南山城平野の中央に位置しているため、丘陵頂部からの眺望は絶佳である。この丘陵上には、前方後円墳飯岡車塚古墳をはじめ、大円墳ゴロゴロ山古墳・弥陀山古墳・薬師山古墳・トヅカ古墳などの円墳、近年発掘調査の行われた東原古墳・飯岡横穴などが存在し、時期的にも古墳時代前期から後期に至る各時期のものが含まれている。(24)

第21図　飯岡古墳群分布図

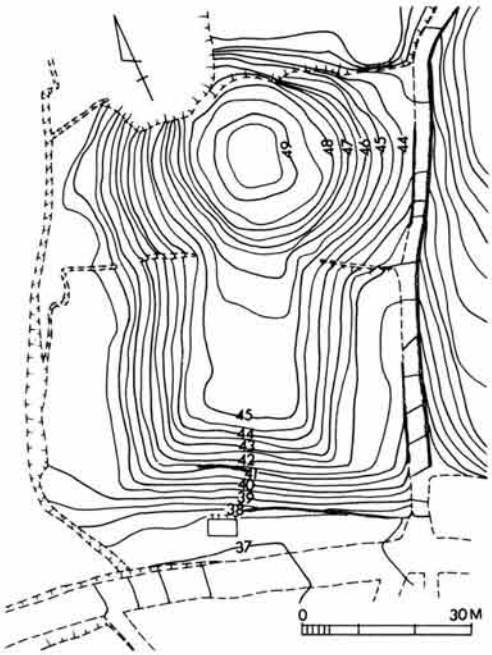
1.飯岡車塚古墳　2.弥陀山古墳　3.ゴロゴロ山古墳
4.薬師山古墳　5.トヅカ古墳　6.東原古墳　7.飯岡横穴

車塚古墳は、丘陵西端のやや舌状に張り出たところを切断して築かれた、尾根に直交した形の南々西に面した前方後円墳である。現在茶園と雑木林になっており、後円部北側は土取りによりガケになっている。全長約90ｍ、後円部径約60ｍ、前方部幅約42ｍを測り、葺石・埴輪ともに存在する。特に、昭和51年３月に行われた、車塚古墳東側道路拡張工事に伴う発掘調査によって、墳丘最下段の葺石とその外側をめぐる楕円形の埴輪列の存在が確かめられた。主体部は、明治35年に後円部が掘りおこされ、主軸に沿った、割石を小口積みにした竪穴式石室がみつかっている。石室は長さ約2.4ｍ、幅約1.2ｍ、高さ約1.2ｍの規模で、幅広の短いものといえる。粘土床が存在し、遺物として勾玉４、管玉26、小玉一括、石釧24（このうち３点には、特珠な刻文がある。）、石釧破片１包、車輪石４、車輪石破片１包、鍬形石１、脚付小形坩破片１、刀剣破片１包があった。ただ、この石室には、天井石がなかったといわれているが、遺物の中に鏡類が含まれていないことを考えあわせると、古くに盗掘された可能性がある。築造時期については、前方部のあまり開かない墳形、短い竪穴式石室、石製品（特に碧玉製腕飾類）の豊富さ、埴輪の特徴などから、４世紀末頃と考えられる。

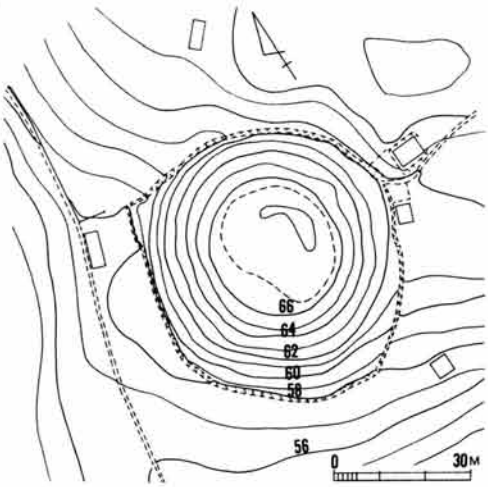


第22図　飯岡丘陵遠景（南東から）

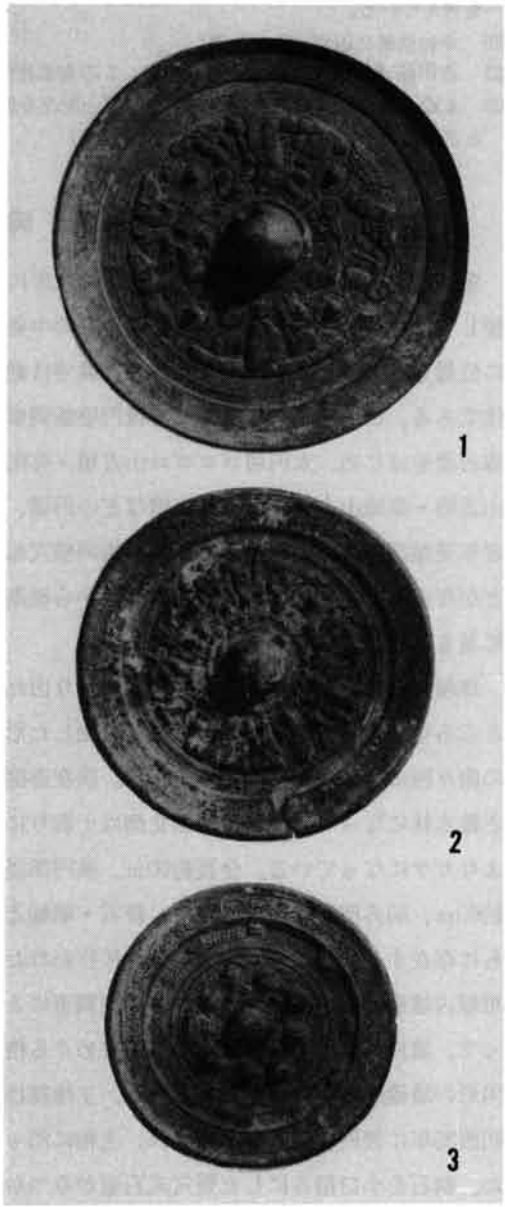
ゴロゴロ山古墳は、飯岡丘陵のほぼ中央、最高所に位置する、径約60ｍ、高さ約９ｍを測る山



第23図　飯岡車塚古墳地形図
（拠『南山城の前方後円墳』）



第24図　ゴロゴロ山古墳地形図
（拠『南山城の前方後円墳』）



第25図　トヅカ古墳出土鏡

城地方でも最大級の円墳である。墳頂部には径約20mの平坦面をもち、葺石が存在する。墳丘北東部には一部堀がめぐる。立地等からみて車塚古墳より年代的にやや遡るものと考えられる。

薬師山古墳は、ゴロゴロ山古墳の東側にある、径約38m、高さ約6mの円墳で、現在墳頂部に薬師堂がある。

弥陀山古墳は、ゴロゴロ山古墳の北方にある、径約25m、高さ約4mの円墳である。明治初期に盗掘を受けたが、詳細については不明である。

トヅカ古墳は、飯岡丘陵の東端に位置する径約20m、高さ約3.5mの円墳であり、葺石・埴輪ともに存在する。主体部は、主軸を南北方向にとる、丸石（河原石か）積みの竪穴式石室で、4枚の天井石に覆われていた。規模は長さ約3m弱、幅約70cm、深さ約90cmを測る。副葬品として、鏡3面、勾玉2、管玉・小玉多数、鹿角製装具付刀剣、馬具（轡・杏葉）がある。鏡は、踏み返し鏡の神人車馬画像鏡（第25図1）・尚方作神人画像鏡（第25図2）と仿製鏡の変形一神四獣鏡（第25図3）の3面である。この古墳の築造年代は、5世紀後半と考えられる。

飯岡東原古墳は、薬師山古墳とトヅカ古墳のほぼ中間のゆるやかな傾斜面に存在する。昭和53年3月に主体部の調査が行われた。墳丘については、既に茶園等により削平されたものと考えられる。主体部はほぼ南北方向の木棺直葬で、棺の長さ約1.95m、幅は残存最大で53cmを測り、墓壙は残存長3.0m、残存最大幅1.33mである。棺内外の出土遺物には須恵器・土師器・鉄製刀子がある。築造年代は、6世紀前半とされる。

飯岡横穴は、飯岡丘陵東南端の南にのびる小支丘先端にみられる花崗岩岩盤の南斜面を掘削して築造された横穴である。古くから開口しており、後世には信仰の対象となっていたようである。昭和53年に横穴内部と周辺部の発掘調査が行われ、横穴の形態・規模や再利用の状況等が明らかにされた。横穴は、ほぼ南向きに開口し、羽子板形のプランをもち、天井はかまぼこ形の断面形態である。羨道部は崩落のために全容をつかめていない。玄室は両袖式で長さ4.1m、幅1.72～2.32m、高さ約1.5mを測る。6世紀後半～末頃の築造と考えられ、10世紀には再利用が認められ、その後何度となく利用が繰り返されている。

これらの他、古塚・馬塚・福塚・狐塚・経塚等の古墳があったことが知られている。

なお、この飯岡丘陵の南傾斜面を中心とする一帯には、弥生時代の遺物が広範囲に散布しており、飯岡遺跡[25]と呼ばれている。昭和34年には竪穴住居1基が調査によって明らかとなり、東原古墳調査時にも溝状遺構が検出され、昭和57年の調査では方形周溝墓の一部かとみられる溝が検出されている。時期的にはいずれも畿内第5様式に属するものであり、現在同志社校地内に保存されている田辺天神山遺跡とともに、南山城における高地性集落の代表例といえよう。

（鷹野一太郎）

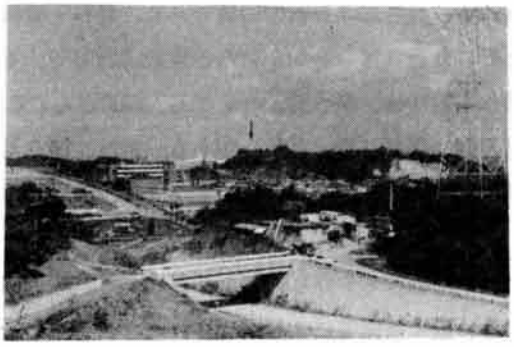
（注）

(24) 付表2文献一覧表番号1・7・14・15・16・25・30・41・44・53・65・66

(25) 付表2文献一覧表番号55

11. 田 辺 天 神 山 遺 跡

田辺天神山遺跡[26]は、普賢寺谷の入口北側、標高82m付近の丘陵上に存在する弥生後期の集落跡である。それは一般的に高地性集落と呼ばれ、同時期の各集団間の緊張関係により営まれ、古墳発生の謎をとくひとつの鍵とされる。過去3回にわたって発掘調査が行われ、現在は同志社校地内に史跡公園として保存展示されている。丘陵上の南北約60m、東西約45mの楕円形の平坦地に、重複した20軒以上の住居跡が発見されており、さらに東方につづくものと考えられる。



第26図　田辺天神山遺跡遠景（南から）

1号住居跡　東西6.05m・南北6mのほぼ正方形プラン。壁高は最大62cm。4本柱（深さ50～60cm）・炉跡（径90cm・深さ26cm）・周溝・排水溝・炉から北隅にのびる溝をもち、西北壁北寄りで、出入口に伴う土積みがある。埋土内から石鏃・砥石・鉄刀子・異形青銅器が出土。火災にあったものとみられる。

2号住居跡　1号住居廃棄後に営まれたもの。方形の平地式住居の可能性がある。

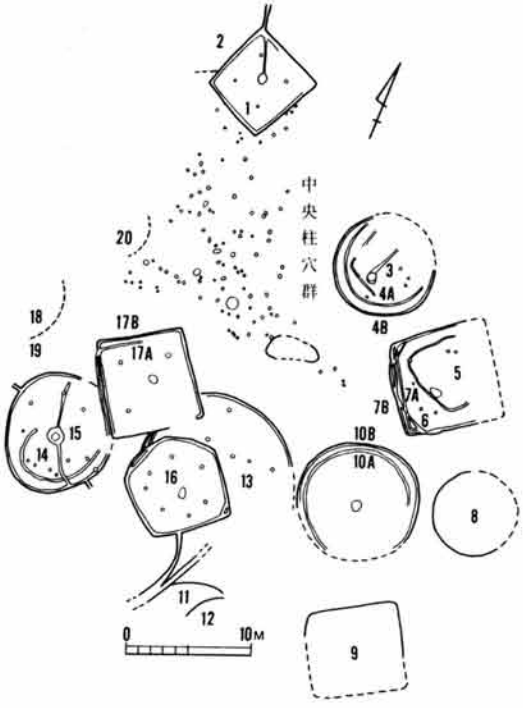
3号住居跡　東西約5m・南北3.5m以上の隅丸方形プラン。

4号住居跡　a：3号住居跡を改築した、長径7.2m・短径6.8mの楕円形プラン。6本柱・周溝・排水溝をもつ。b：aを南に拡張した直径7.9mの円形プラン。壁高は南で54cm、西で50cm、周溝・排水溝・東南壁近くに炉跡・西側に出入口をもつ。

5号住居跡　東西5.8m・南北約5mの長方形プラン。周溝をもつ。丸く加工した石英が出土。

6号住居跡　5号住居跡を改築した、一辺約7.4mの方形プラン。周溝・柱穴（4本柱か）をもつ。

7号住居跡　a：5号・6号住居跡に重なった、一辺7.4mの方形プラン。周溝・柱穴（4本柱か、深さ30～35cm）・炉跡（深さ10cm）をもつ。b：aの南西辺を拡張させた方形プラン。6号・a住居跡の周溝を覆う厚さ10cmの張り床、東南辺中央の礫敷（出入口）・周溝をもち、柱穴・炉はaと同じ。礫敷上面から小型壷、礫下の周溝から磨製石斧が、また、複合口縁大型壷、砥石、クワ・スキ先状鉄器、鉄鏃状鉄器など出土。他に須恵器片がある。



第27図　田辺天神山遺跡遺構配置図
（拠『田辺天神山弥生遺跡』）

8号住居跡　直径約7mの円型プラン。

9号住居跡　一辺7mの方形プランか。

10号住居跡　a：長径9m・短径8mの楕円形プラン。周溝をもつ。b：aを外方へ拡張した長径9.8m・短径約8.8mのもの。周溝・炉跡をもつ。鉄鏃が出土。

11号住居跡　円形プラン。

12号住居跡　11号住居跡床面を切った円形プランのもの。砥石・鉄鏃が出土。

13号住居跡　直径約12.5ｍの円形プラン。壁高40cm。周溝・柱穴（深さ30～50cm）をもち、建てかえの可能性がある。

14号住居跡　長径（南北）６ｍ以上、短径（東西）5.6ｍの楕円ないし隅丸方形プラン。周溝・柱穴をもつ。

15号住居跡　14号住居跡を全て削平後改築した、長径9.5ｍ・短径8.4ｍ楕円形プラン。壁高は北で55cm、南で28cm。周溝・７本柱・排水溝・炉跡（径1.2ｍ・深さ55cm）・炉跡を通る溝をもつ。砥石が出土。

16号住居跡　13号住居跡を切った、五角形プラン。壁高は北西部で50cm。他より幅広の周溝・排水溝・５本柱（深さ40cm）・炉跡（70cm×45cm・深さ15cm）をもち、同位置での建てかえがある。床面近くから蛤刃石斧片・鉄刀子片が出土。

17号住居跡　ａ：一辺6.7ｍの方形プラン。周溝をもつ。ｂ：ａを平行移動して改築した、同規模の方形プラン。壁高は30cm残る。床面はａのそれを削り、東隅・西南辺南側では13号・15号住居跡の上に盛土して設ける。周溝・４本柱（深さ30～40cm）・炉跡（深さ30cm）をもつ。西隅周溝上から原位置で砥石が、東隅床面近くから斧状鉄器の刃部が出土。

18号住居跡　崖面に幅６ｍの断面を検出。

19号住居跡　15号住居跡の西側に溝を検出。

20号住居跡　肩の一部が検出。

以上の住居跡は、弥生後期の連続した時間の中で営まれ続け、不整円形→円形→方形へとプランの変遷がみられる。また、住居跡のうち低地に見通しのきく北東部分に位置するものは、ほぼ同じ場所での建てかえがみられ、一方南寄り部分のものは、住居跡の重複が多い。この両者に囲まれるように住居の営まれない空閑地があり、そこには中央柱穴群と呼ばれる、貯蔵穴を含む柱穴群が存在する。

出土の土器は、大半が弥生後期（Ｖ様式）のもので、３号・４号住居跡には少量の中期の土器がみられ、集落の開始をその時期に求めることもできよう。一方、５号・６号・７号住居跡からは、Ｖ様式でも最末期もしくはそれよりやや降る時期の土器がかなり出土し、その頃が集落の終焉とみられる。また、土器の中に少量近江・東海地方からの搬入品とみられるものがある。

（鷹野一太郎）

（注）

(26)　付表２文献一覧表番号32・33・36・46・54・58

12. 三　山　木　廃　寺

江津集落の西方、式内佐牙神社の南側からは多くの古瓦が採集され、古くから寺院跡と推定されている。[27] 伽藍配置等は不明である。付近は現在竹やぶとなり、土取り等によって旧地形はかなり損われているようである。出土の瓦より当廃寺の創建は白鳳時代にさかのぼると考えられ、鎌倉時代頃まで存続したらしい。

第28図　三山木廃寺周辺近景

図版第５、図29・30は京都国立博物館及び今中久男氏蔵の三山木廃寺出土の瓦類で、１～９は軒丸瓦、10～17は軒平瓦、18は鬼瓦である。

１は素弁八葉蓮華文を内区とし、花弁端はわずかに反転させ、尖っておわる。磨滅しているが周縁には一重の圏線がめぐる。灰白色を呈し、軟質。直径約16cm。白鳳時代。同じものが普賢寺跡にもみられる。２は素弁八葉蓮華文を内区とし、花弁の中央を凹ませ、間弁の中央に珠文をもつ。表面暗灰色の軟質。白鳳時代。３は細弁十六葉蓮華文を内区とし、間弁が圏線のようにめぐり、中房は圏線を伴い、１＋８＋16に蓮子を配する。内縁は珠文32個、外縁には２種の宝相華文（ ・ ）が９個ずつ交互に飾られ、文様構成上特異なものである。黄灰色を呈し軟質。直径14.7cm。奈良時代。４は複弁八葉蓮華文を内区とし、弁央で二分割された、弁端の丸い花弁をもつ。同型式の花弁が法隆寺のものにみられる。外縁は宝相華文（ ）24個で飾られる。灰白色を呈し軟質。直径13.8cm。奈良時代。５～８は平城宮式のもので、いずれも複弁八葉蓮華文を内区とし、外縁は線鋸歯文で飾る。５は6282Ｂで灰褐色を呈し軟質。直径16.2cm。６は6282Ｄと同笵、表面黒灰色を呈し軟質。直径13.2cm。７は6282Ｇで淡褐色を呈し軟質。直径16.0cm。８は6282Ｉで淡灰褐色を呈し軟質。直径15.6cm。９は細弁十六葉蓮華文を内区とし、重弁風につくられる。内縁は幅狭く、28(？)個の珠文がめぐり、外縁は素文である。黄褐色を呈し軟質。直径15.3cm。奈良時代。

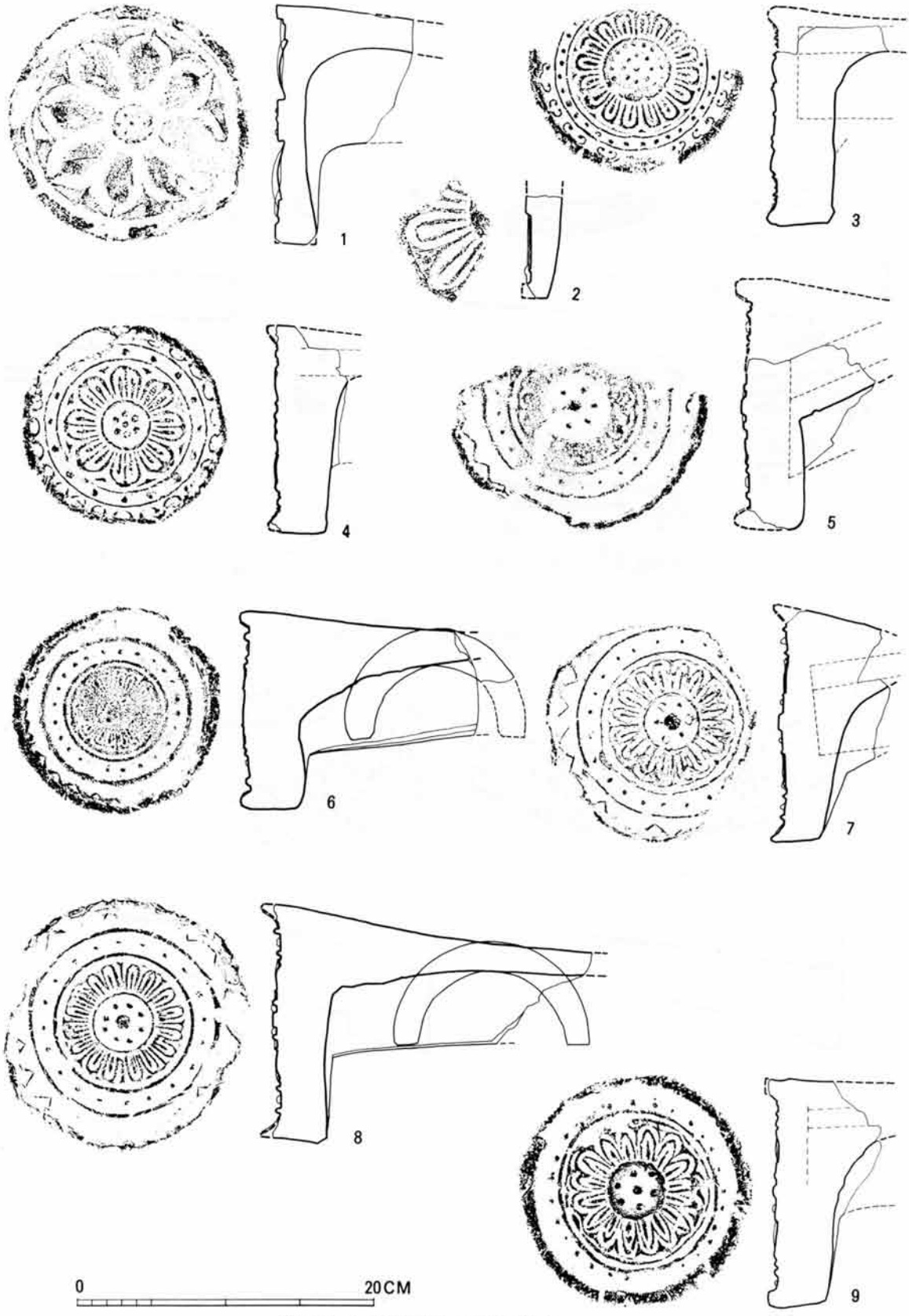
10～13は四重弧文（10）・五重弧文（11～13）で、瓦当面は櫛状のもので引いたように作られる。いずれも無顎で、平瓦部凸面には凸帯文が施され、黄褐色ないし淡黄褐色を呈する軟質のもの。白鳳時代。普賢寺跡からも同様の五重弧文のものが出土している。14は型による押し引きの五重弧文であり、灰色を呈し硬質。白鳳時代。15は三山木廃寺独特の忍冬唐草文を内区とする。特異な中心飾から左右対称に３回反転する忍冬唐草文をもつが、一見宝相華文のようになっている。淡褐色を呈し軟質。上弦弧26.3cm・下弦弧25.3cm・弧深5.9cm・厚3.8cm。奈良時代。16は中心飾が逆「小」字の均整唐草文を内区とし、灰白色を呈し軟質。平城宮6726系か。17は均整唐草文を内区とする。瓦当面左方に笵のキズが長く走る。表面黒色を呈し軟質。奈良時代。同笵例が普賢寺跡にある。

18は鬼面鬼瓦の鬼面の一部分で、４歯・高い鼻・左目がみられる、立体感のあるもの。

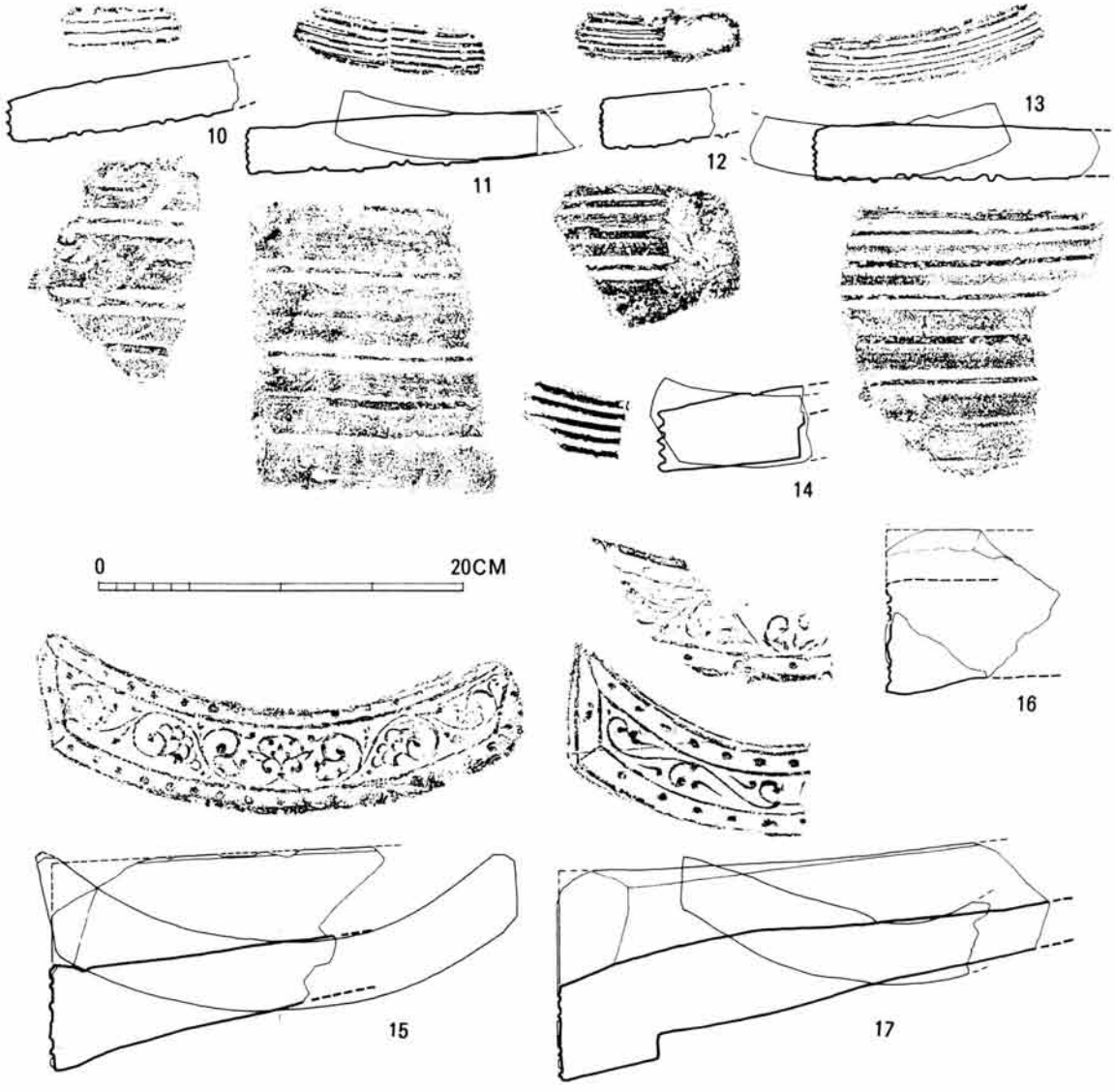
（鷹野一太郎）

（注）

(27)　付表２文献一覧表番号６・10・16・17・27・48



第29図　三山木廃寺出土軒丸瓦実測図



第30図　三山木廃寺出土軒平瓦実測図

13. 同志社田辺校地内の窯跡

はじめに

同志社の田辺校地は、興戸・三山木・普賢寺の区域にまたがるおよそ30万坪の地域である。普賢寺川に南面する低丘陵と、小さく入り込んだ谷をもちながら、若干の起伏を示しつつ西に寄って高度を除々に増している。この地域にかかわる考古学的調査は、同志社が土地を購入する直前に、京都府教育委員会によって下司古墳群が発掘されたのが最初のことであり、6世紀から7世紀にわたる古墳群として、1968年に報告されている。次いで、同志社大学によって天神山遺跡が発掘調査されている。竪穴住居跡群によって構成されている弥生時代後期の高地性集落が確認されたわけである。報告書は、1976年に刊行されている。また1977年には、都谷中世館が同志社大学によって調査され、同年報告書が刊行された。

一方、同志社田辺校地内の遺跡の分布調査は、2次にわたって実施され、その成果は、都谷中世館の報告の中に分布図とともに収録されている。この分布図に記載されているLoc. 6と、Loc. 15が1979年から1981年にかけて確認された須恵器窯跡であり、その概要は次に示す通りである。

まむし谷須恵器窯跡（田辺校地 Loc. 6）

1976年の分布調査の際、新宗谷郭群とLoc. 4の間に存在する小支谷の奥まった山道上で、須恵器片が若干採集された。南西に向けて下降する緩斜面と付近にみられる小流からも窯跡の存在する可能性が考えられ、後日の発掘調査に期待された。俗にまむし谷と呼ばれる地域であった。同志社の開発申請が認可されるに至って、学術調査が計画され、1981年に発掘調査が実施された。

窯構造の確認　小丘陵の裾に近い位置で検出された窯跡は、すでに焚口部分と窯尻及び煙道部分が欠失していたが、窯体の中央部の残存状態は良好であった。天井部分が崩壊して全面を覆っている中央部は、スサ混りの窯壁がブロック状に確認されるものの、側壁の床からの立ち上りを充分に予想し得る状態であった。砂礫層から成る大阪層群の上部を掘り込んで床が形成され、側壁から天井部にかけては、スサ混りの粘土でつき堅められた窯壁をもっていたことを示している。したがって、窯の構造は、丘陵の斜面を掘ってつくられた半地下式の窖窯とすることができる。残存した窯体の規模は最大幅1.5m、長さ5.5mであるが、焼成室の大部分が残っているとはいえ、燃焼部は完全に欠失しており、当初の規模を確認することはできない。

出土の遺物　崩壊した天井部の直下から多量の須恵器が出土している。器種は杯、甕、壺、鉢などであるが、圧倒的に多いのは杯である。これらの杯には大小の差があっても規格性をよく示していて、蓋の宝珠つまみなどにも斉一性が認められる。杯に次いで甕の破片が多いが、壺、鉢の量は少ない。現在資料の整理中であって、報告書が準備されているため詳細は報告書を待ちたい。なお、調査中の現地説明会及び、1981年のアサヒグラフの特集で公表されている資料にしたがえば、これらの遺物は、8世紀の前半の時期が与えられている。

遺跡の特徴　男山丘陵や南山城の須恵器窯跡のうち、現在までに知られている窯跡の中でも、

第32図　新宗谷窯跡採集須恵器片

天井部崩壊の残存状態をこれ程よく示す例はない。全国的にみても好例といえよう。それだけに、一単位の窯での器種構成とそれぞれの量的な差を検討し得る点で、重要な窯跡であり、群を構成しない点でも特徴的である。田辺町内に分布する単独の窯跡とともに、窯跡の推移を考える上でも貴重な例といえよう。

新宗谷須恵器窯跡（田辺校地 Loc. 15）

1973年から1974年にかけて、川北通夫氏によって須恵器片や窯壁片が採集され、付近に須恵器窯跡の存在が考えられた。隣接する都谷中世館が調査されるに及んで、1500年代の中葉までに築造された館跡の造営時点で、すでに破壊されて付近の地形が大きくかえられていることが認められた。すなわち、館跡の主要部分を平坦地とすべく造成された1500年代の埋め土の中に須恵器片が検出され、特に西側の小さい谷に面した部分の盛土部に顕著であった。普賢寺川に面して並存する館跡群のすべてがそうであるように、館の造営に当って平坦地をつくり出しており、ときには部分的に削出し、ときには盛土をするといった造成が15世紀の後半から16世紀にかけてみられたわけである。新宗谷須恵器窯跡の破壊は、すでにこの時点でおこなわれていた。したがって、窯跡の原位置

第31図　まむし谷窯跡

上：窯天井部崩壊状況
中：須恵器出土状況
下：窯の床面

を確認することはできないが、集中して須恵器片や窯壁片を散在する地点があることから、原位置の可能性の強い地点を想定することができた。

原位置の可能性をもつ地点の発掘調査では、結局のところ遺構の確認はできず、須恵器片や窯壁の一部を検出したにすぎない。

出土の須恵器片は、杯が多く若干の甕の破片を認めるのみであった。これらの須恵器を従来の編年によって年代を与えると、7世紀の後半から8世紀にまたがる資料が含まれていて、まむし谷須恵器窯跡に先行する窯跡であることを示している。なお、これらの資料も整理中であり、まむし谷須恵器窯跡とともに報告書の刊行が準備されている。　（鈴木重治）

14. 下 司 古 墳 群

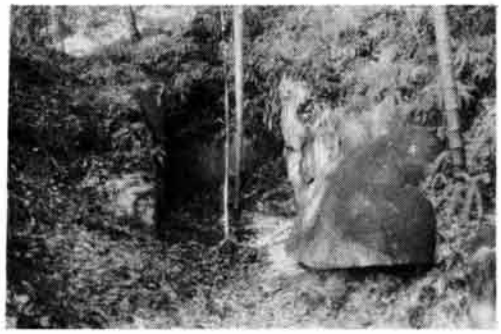
普賢寺谷にはいり、多々羅集落の西北、新宮社の西側のやや高まった丘陵南斜面に下司古墳群[28]は存在する。いずれも古墳時代後期の横穴式石室墳である。昭和38年に発掘調査が行われており、それによって概要を知ることができる。当時既に破壊が進んでおり、現在みるのと大差なかったようである。

1号墳　群中東端に位置し、最大規模のものと思われる。墳丘については、破壊・流出のため不明である。主体部は南開口の両袖式横穴式石室である。その規模は、玄室長3.5m・幅2.0～2.1m・高さ（推定）2.3m、羨道長約7m・幅1.8m・高さ（推定）1.9mを測る。石材は花崗岩の大きな自然石を用い、側石は面をそろえている。床面には礫石が敷かれていたようである。後世の撹乱を受けてはいるものの、石室内からは、陶棺片・金銅釘・須恵器・土師器・鉄鏃片などが出土している。

2号墳　1号墳の西30m程のところの急な斜面を利用して築かれた直径約15mの円墳である。1号墳と同様、南開口の両袖式横穴式石室を主体部としている。天井石は除かれており、玄室は長2.76m・幅1.6mを測り、羨道は片側最下段のみ残っており、長4.65m・幅1.2mを測ることができる。玄室及び羨道の半分にわたって厚さ10cm程礫が敷かれていた。土師器・須恵器・瓦器・鉄釘・鉄環が出土している。また、縁金具らしき鉄製品と鉄釘から精巧な箱形木棺の存在が推定される。

3号墳　2号墳の西に接した径約15mの円墳で、南開口の横穴式石室をもつ。玄室は長2.5m・幅1.5mと推定されるが、羨道部は完全に破壊されている。

4号墳　3号墳の西20mの、石材の抜き跡と石材の散乱している地点で、横穴式石室だったようである。



第33図　下司1号墳石室

以上述べてきた下司古墳群は、南山城地域で

も有数の横穴式石室を主体部とする後期古墳群である。築造年代は、6世紀末葉から7世紀前半にかけて継起的に営まれたものと推測されるが、群中では1号墳が最も遅れて築かれたようである。古墳群は現在、同志社校地内に現状保存されている。

なお、『京都府遺跡地図』には5号墳まで記されているが、5号墳については確認できなかった。

（鷹野一太郎）

（注）

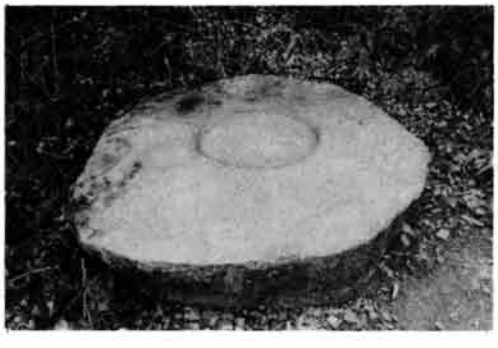
(28) 付表2文献一覧表番号12・13・25・26・28

15. 普 賢 寺 跡

現在普賢寺集落の東端にある観音寺は、かつて筒城大寺と呼ばれた普賢寺[29]の後身である。

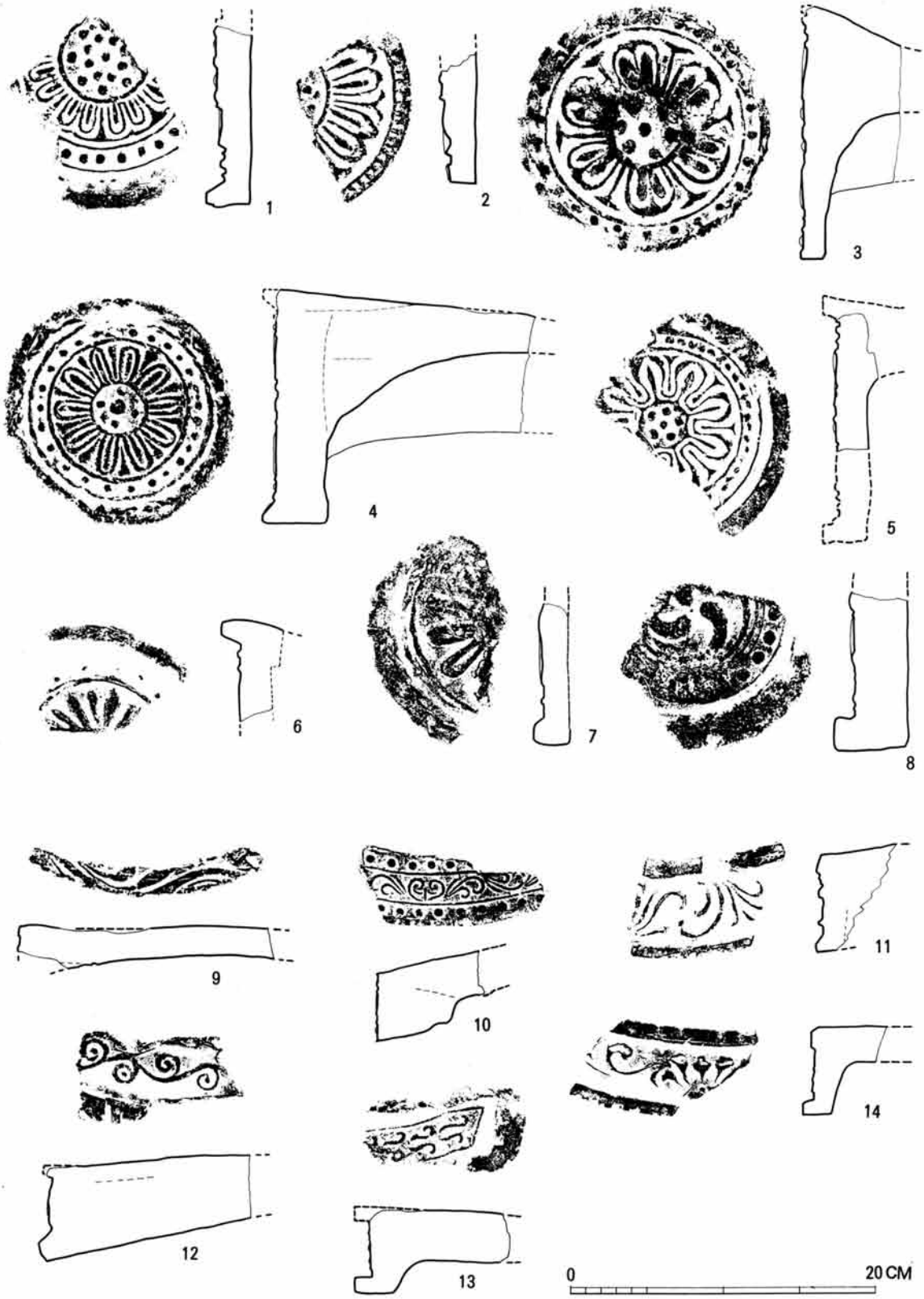
寺伝によれば、普賢寺は天武天皇の勅願により義淵僧正が創建し、観心山親山寺と称した。天平16年（744）聖武天皇の叡願により良弁僧正が伽藍を増築し、息長山普賢教法寺と号し、十一面観世音立像（現在国宝指定を受けている）を安置した。良弁の高弟実忠和尚を第1世とし、法相・三論・華厳の三宗を兼ねたというから、南都仏教の範囲内である。その頃の伽藍は釈迦堂（本尊釈迦如来）・大御堂（本尊丈六十一面観音、二十八部衆四天王像）・小御堂（本尊普賢菩薩）・大講堂（本尊薬師如来）・地蔵堂・奥観音堂（本尊正観音）・五重塔（五如来、宝亀9年（778）建立）・二王門（多聞、地国、釈迦十六弟子）・祖師堂・南大門・東大門・西大門・僧坊二十余宇と伝える、壮観を誇るものだった。延暦13年（794）火災にあったが、仁寿3年（853）藤原良房が本願主となって再興、天暦6年（952）興福寺の定昭大僧都が再建に携った。治暦4年（1068）の火災のときは大乗院頼実僧都が再興、文治5年（1189）実信僧正（基通の子）は近衛基通を大檀那として伽藍再興にあたり、嘉禎3年（1237）に落成した。以後近衛家の庇護をうけたが、戦国時代の近衛家の凋落により寺運も衰えた。永享9年（1437）の火災による再建は大西志摩守が諸国を勧請し、同11年大御堂・小御堂が再建されたが、永禄8年（1565）の火災のときは大御堂のみ再建された。

第34図　普賢寺跡（大御堂観音寺）遠景



第35図　普賢寺跡塔心礎

現在の観音寺は本堂・庫裡・鎮守（地祇神社）だけであり、本堂は昭和28年（1953）の再建で、単層の入母屋造、本瓦葺の南面するものである。



第36図　普賢寺跡出土瓦実測図

これらの西方丘陵上には、中央に径45cm・深さ3cmの凹みをもつ塔心礎が露出しており、周囲には古瓦が散乱しているので、ここが、塔跡であると推測される。

図版第3・第4(上)、第36図は現在観音寺所蔵の軒瓦類で、白鳳時代のものから近世のものまである。1～8は軒丸瓦で、9～14は軒平瓦である。

1は複弁八葉蓮華文を内区とし、中房は大きく1＋8＋8に蓮子を配し、間弁が花弁をとり囲む。内縁には中房蓮子と同大の珠文がめぐり、外縁は素文である。黄褐色を呈し軟質。白鳳時代。2は複弁八葉蓮華文を内区とし、花弁の先端を大きく反転させ、周縁は外行鋸歯文を飾る。淡褐色を呈し軟質。他に青灰色を呈し硬質のものもある。白鳳時代。『飛鳥白鳳の古瓦』掲載の244京都普賢寺例と同笵かと思われ、それでは中房に1＋6＋12の蓮子を六角形に配している。3は法隆寺系のもので、複弁六葉蓮華文を内区とし、弁端は丸く弁央で2分割される花弁をもつ。内縁には珠文をめぐらし、外縁は低く狭い。瓦当は薄くつくられる。淡灰白色を呈し軟質。直径16.5cm。白鳳時代。4は単弁十葉蓮華文を内区とし、中房は1＋4に蓮子を配するが、中心のものは他のものより大きい。内縁には珠文がめぐり、外縁は線鋸歯文で飾る。淡褐色を呈し軟質。直径約15cm。奈良時代。平城宮6282系に連なるものと解される。5は出土点数の多いもので、単弁八葉蓮華文を内区とし、1＋5に蓮子を配する中房は八角形を呈し、その各頂点から子葉がのび、連続した花弁となっている。内縁には珠文がめぐり、外縁は幅広の平坦面をもつ直立素縁である。淡灰色を呈しやや硬質。奈良時代。山陰地方の国分寺に同系統のものがみられ、丹後国分寺からは同じものがみつかっている。6は単弁蓮華文を内区とし、内縁には珠文がめぐり、素文の高い外縁をもつ。淡灰色を呈し軟質。平安時代。興戸廃寺3などと同笵のものかとも思われるがよくわからない。7は単弁蓮華文を内区とし、弁央を凹ませた花弁をもつ。淡褐色を呈し軟質。三山木廃寺2などと同様の花弁をもつが、一応平安時代と考えておく。8は右回りの三巴文を内区とし、巴の中心に小粒の珠点をもつ。表面黒色を呈し軟質。鎌倉時代。

9は忍冬文の一種と考えられる文様で、瓦当は2枚重ねでつくられるがが、下半部ははずれている。淡黄褐色を呈し軟質。白鳳時代。10は中心飾が「小」字形の均整唐草文を内区とする平城宮系のもの。上下周縁は珠文で飾る。瓦当面黒灰色、他は淡褐色を呈し軟質。奈良時代。11は唐草文を内区とする厚手のもの。黒灰色を呈し硬質。一応平安時代。12は内への巻きこみの強い連続した唐草文を内区としたもので、平瓦部凹面に粗い布目を残す。淡褐色を呈し軟質。平安時代。13は単純化させた小さな唐草を上下2段に並べ配したもの。黒灰色を呈し硬質。鎌倉時代。14は珠文から上へ3葉、左右へ1葉ずつの中心飾と均整唐草文を内区とする。淡褐色を呈し硬質。江戸時代。図示しなかったが、三山木廃寺に多くみられる細い線引きの五重弧文のものがある。

以上の他に、個人蔵のもので、九州太宰府と同笵の平安時代の軒丸瓦や、三山木廃寺と同型式の白鳳時代の軒丸瓦・同笵の奈良時代の軒平瓦など多くのものが知られているが、今回は割愛した。

（鷹野一太郎）

（注）

㉙ 付表2文献一覧表番号11・13・16・17・18・27・38・79

16. 小 田 垣 内 遺 跡

小田垣内遺跡は、普賢寺谷に川を挟んで存在する数多くの館跡ないし城跡のひとつで、宇頭城川が合流する付近の普賢寺川右岸にあり、南側丘陵地から普賢寺谷に延びた低丘陵上に位置する。丘陵裾には、永禄年間（1558～69）に建てられた田宮館の一部が現存する。

丘陵上に南北長約250ｍ、東西幅30～50ｍの範囲に階段状に削平地があり、ほぼ中央には、丘陵に直交するように溝を伴って土塁がみられ、南側には堀切がある。また、堀切の付近には背後の丘陵や西の丘陵に向かう逃げ道用に作られたとみられる土塁もある。

城主、築造年代などは明らかでないが、丘陵裾にある田宮館との関連が考えられ、田宮館の一部か、または緊迫時に城として利用されたものかと推定される。（鷹野一太郎）

第37図　小田垣内遺跡遠景（手前田宮館、北から）

第38図　小田垣内遺跡見取り図
（提供　城郭史研究会）

17. シ オ 古 墳 群

天王集落の北方、枚方へ通じる道の西側の丘陵上に存在する古墳群である。[30]

1号墳は、南に開口する両袖式の横穴式石室を主体部とするもので、墳丘については、流出のためか不明である。石室の羨道部は埋没しておりよくわからないが、玄室部は天井石も残っており、長さ約4ｍ、高さ1.55ｍを測る。幅は奥壁の下部で1.75ｍ、上部で0.93ｍと、かなりの持ち

第39図　シオ1号墳

第40図　シオ1号墳石室内部

送りがみられる。玄室の両側壁・奥壁は花崗岩の小さな割石を用いて構築されている。羨道部には、下司古墳群と同様の大きめの石が面をそろえたかたちで用いられているようである。副葬品などについては一切明らかでない。

また、かつては付近になお数基存在したらしいが、現在は1号墳のみ残っているようである。ただ、1号墳の西南の竹藪の中に巨石が2個転落している。『京都府遺跡地図』所載の2号墳がこれにあたるものと考えられる。（鷹野一太郎）

（注）

(30) 付表2文献一覧表番号12・13・25

18. 天王畑（普賢寺）城跡

天王畑城跡[31]は、天王の式内朱智神社の北方、三角点の設置されている山頂部に位置し、城の西半分は現在大阪府枚方市に属している。つまり、城自体が河内と山城の国境の役目をなし、東眼下には普賢寺谷を一望できるという地の利を得ている。

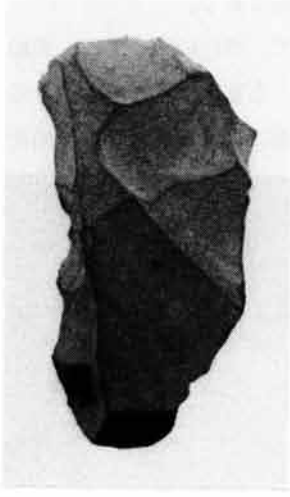
第41図　天王畑（普賢寺）城跡見取り図
（提供　城郭史研究会）

山頂稜部の長約140m、幅約40mの範囲に4ケ所の削平地を設け、本郭である南端の削平地の東側から南側にかけて幅15m、壁高約15mの堀切を設けている。

当城は建武3年（1336）頃、普賢寺土佐守楢盛が南朝のために築城し、貞和3年（正平2、1347）に楢盛の子但馬守孝盛が増築、永正年間（1504～21）に城壁が破壊したが、その後天文年間（1532～55）に再興され、この頃から三好氏の城となったと推定されている。（鷹野一太郎）

（注）

(31) 付表2文献一覧表番号31・73



第42図　高ケ峯遺跡出土サヌカイト製石核

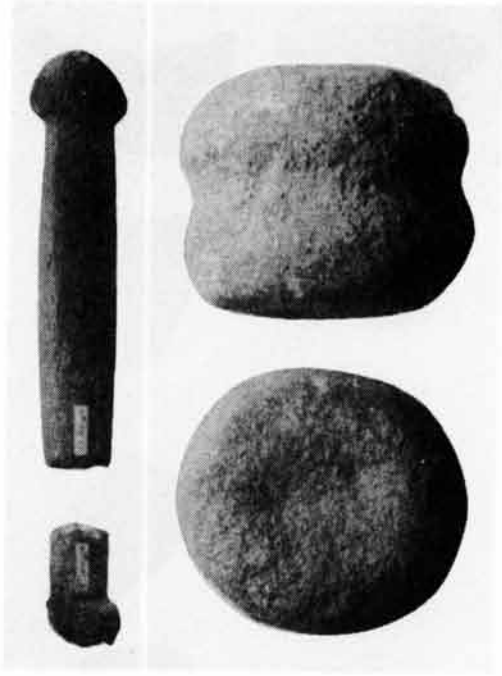
Ⅳ. 諸遺跡出土の遺物

ここでは諸機関および個人蔵の町内諸遺跡出土の遺物についていくつかを時代順に紹介する。

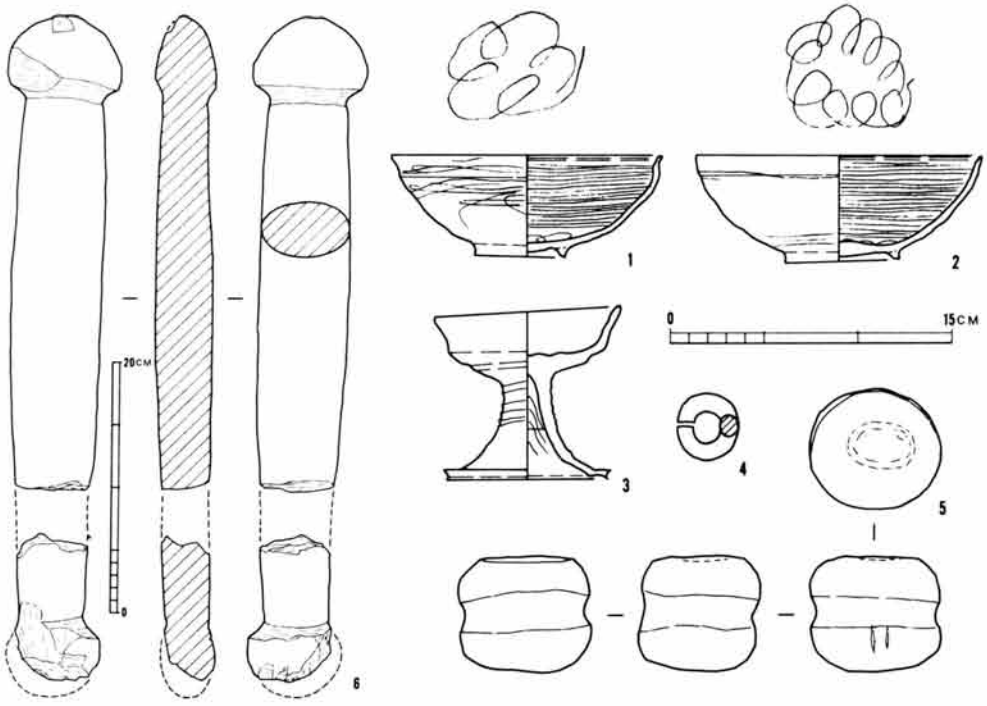
旧石器時代の資料として、天王朱智神社南側の高ケ峯遺跡出土の槫石技法によるサヌカイト製石核がある（第42図）。

縄文時代のものとしては、三山木の石棒として古くから注目されている、山崎神社所蔵の石棒ならびに異形石器があげられる（第43図）。第44図はその山崎神社所蔵の遺物で、山崎遺跡の石棒（6）・異形石器（5）と、現在神社境内地に石室の一部が露出している山崎2号墳（八王子塚古墳）出土と伝える遺物（1～4）で

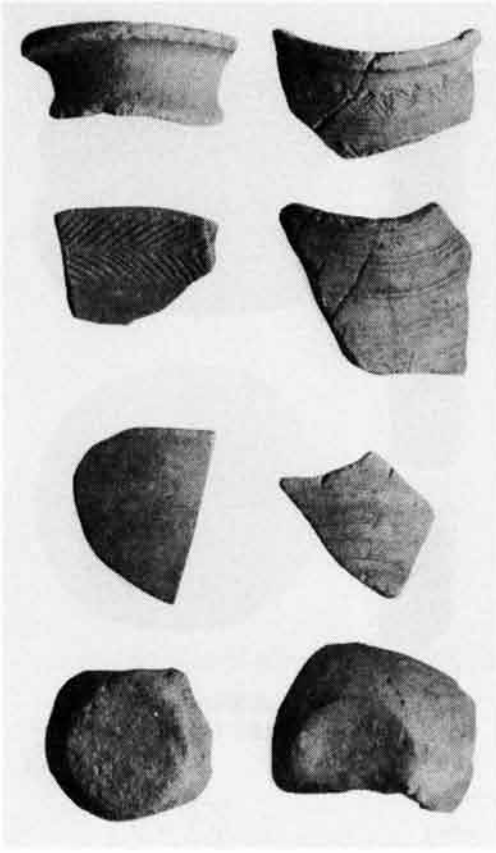
ある。石棒は両頭式のもので、形よく磨かれている。断面長楕円形を呈し、よく残っている方の頭部は、片面は丸味を帯び、もう片面はいく分平滑に仕上げられている。また、表面にはうすく赤色顔料が認められるが、御神体として伝えられているので、本来のものか否かは不明である。5は、石冠の退化形式もしくは石錘かとも考えられるもので、中央で環状に凹んでいるところは、磨かれつるつるになっている。平面円形を呈する二面のうち、一面は凸レンズ状に、もう一面は中央が少し凹んでいる。材質は5・6ともに青色泥板岩である。これら二点は一応縄文時代後期と考えられるが、二点以外には知られないこと、また、山崎神社周辺から同時代の遺物は採集されないことなど、他の地から招来された可能性も考えられる。1・2は瓦器椀で、ともにしっかりした高台で、内側の口縁端



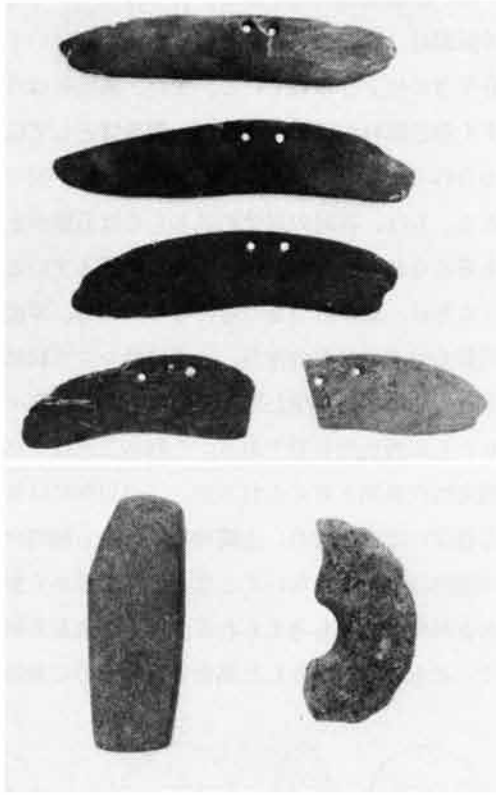
第43図　山崎遺跡出土遺物
（左：石棒、右：異形石器）



第44図　山崎神社所蔵遺物実測図



第45図　狼谷遺跡出土弥生土器

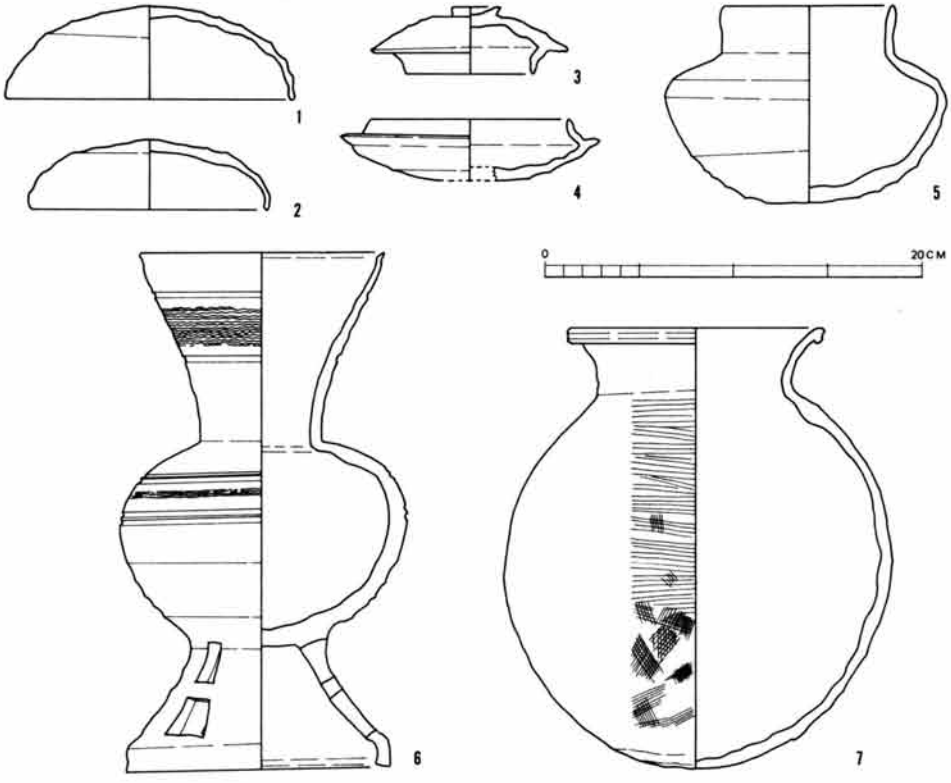


第46図　狼谷遺跡出土石器
（上：石包丁、下：左・柱状石斧、右・環状石斧）

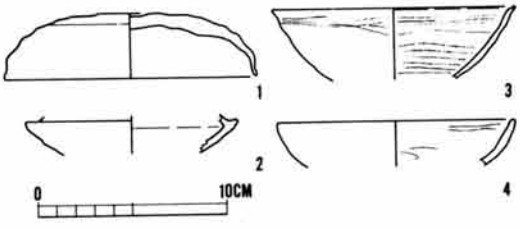
下に沈線をもち、体部外面下半部まで暗文を施すもので、12世紀代の大和型に属すると考えられる。3は須恵器の高杯で、脚部内外面にしぼりの痕がよく残っている。4は金環である。

第45・46図は国鉄大住駅南方、健康ケ丘東方の丘陵地一帯に拡がる狼谷遺跡より吉村正親氏によって採集された弥生時代に属する遺物である。時期的には中期のものが大半をしめ、極少量後期のものも含まれている。遺跡地は現在かなり開発が進んでおり、旧地形を残すところが少なくなっているが、丘陵上に立地するという点からみれば、弥生中期の高地性集落の範疇に含めることもできよう。なお、かつてこの遺跡から採集された弥生土器の壷棺が、現在中央公民館で展示されている。

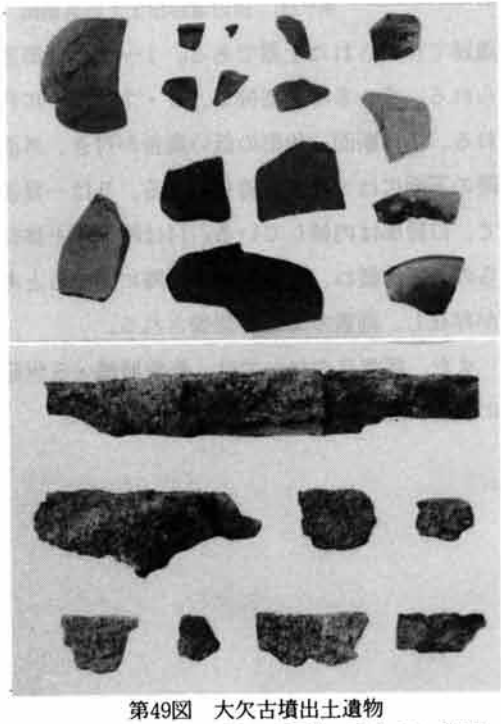
第47図は、大住小学校蔵の内山古墳出土の須恵器である。1・2は杯蓋で、丸みのある天井部をもち、ロクロケズリの範囲は狭い。3は壷類の蓋で、天井部の中心からややはずれたところに凹みのあるつまみをもつ。4は杯身で、内傾する立ち上がりをもち、ロクロケズリの範囲は狭い。5は短頸壷で、直立する口縁部をもつ。6は『田辺町郷土史―古代篇』の表紙を飾った台付長頸壷。頸部・体部には1条ずつ・2条ずつの凹線があり、それらの間には細かな波状文が施されている。台の部分には2段の透かしが3方にあいている。7は球形の体部をもつ壷である。これら



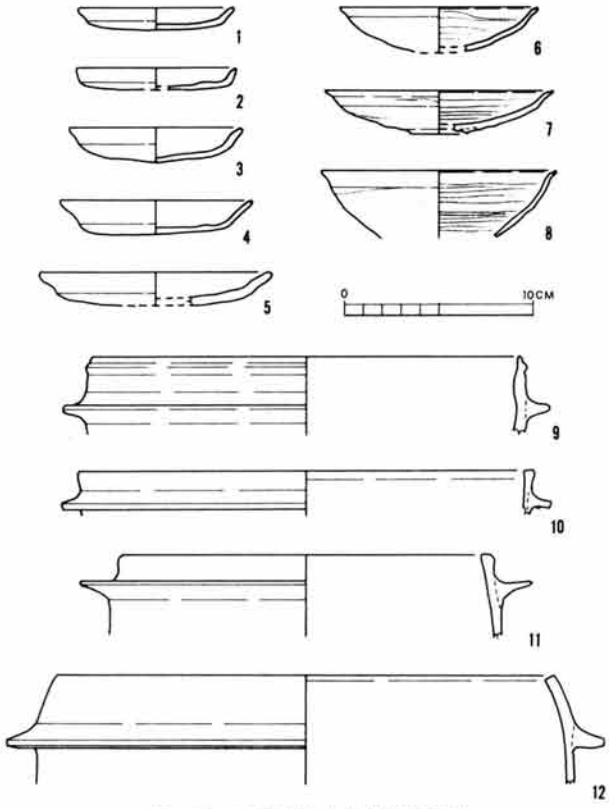
第47図　内山古墳出土須恵器実測図



第48図　大欠古墳出土土器実測図



第49図　大欠古墳出土遺物
（上：須恵器・瓦器、下：鉄刀）



第50図　田辺遺跡出土土器実測図

は6世紀後半に属するものと考えられる。

第48・49図は、粟野謨氏によって採集された大欠古墳出土の遺物である。古墳は薪集落の西方、狼谷遺跡のある丘陵の東斜面に存在する横穴式石室墳である。土器には須恵器のほかに瓦器があり、石室が再利用されたことが推測される。第48図1は杯蓋、2は杯身であるが、杯身は小ぶりなもので、立ち上がりの内傾の度合が強く6世紀でも末葉頃のものと考えられる。3・4は瓦器椀で、3は内面と口縁部外面のみに暗文がみられ、4は内面の一部に暗文がみられるもので、13世紀代に属すると考えられる。第49図下は鉄刀で、1口になるものと思われる。

第50図は、中央公民館西北の田辺遺跡で採集された土器である。1～5は土師器の皿で、内面と口縁部外面になで・よこなでがみられる。6～8は瓦器椀で、6・7は浅手に作られ、6は高台が付かず、内面にのみ暗文がみられる。7は断面三角形の低い高台が付き、外面にも粗い暗文がみられる。9・10は瓦器の羽釜で、鍔の下面にはススが付着している。9は一見須恵器のような焼成である。11・12は土師器の羽釜で、口縁部は内傾している。11は鍔下面と体部外面。12は外面全体にススが付着している。これらの土器は概ね、13世紀後半以降に属すると考えられる。この遺跡の西方丘陵上には、田辺城跡が存在し、両者の関連が想像される。

また、採集品のなかには、形象埴輪・5世紀代に遡るとみられる須恵器・瓦・陶器などのほかに焼土、窯壁かと思われるものがある。

（鷹野一太郎）

付　　表

付表１　田辺町遺跡一覧表

付表２　田辺町埋蔵文化財関係文献一覧表

付表1　田辺町遺跡一覧表

番号	名称	所在地 大字	所在地 小字	種類	時代	立地	遺跡の概要	遺物	現状	文献	備考
1	天神社古墳	松井	里ケ市	古墳	古墳	丘陵	天神社裏　円墳径20m・高さ2m		完存	25	
2	松井横穴群	〃	上西浦	〃	古墳後期	丘陵腹	来迎寺西方　第Ⅲ項参照	須恵器・金環	半壊	3・5・25・50・51・61	
3	向山遺跡	〃	〃	散布地	弥生後期	丘陵頂		弥生土器・石斧・磨製石剣	竹林	25	
4	キンリンサン古墳	大住	八王寺	古墳	古墳中期	低台地	削平され東側一部のみ残存	土師器・須恵器	全壊	25	
5	大住車塚古墳（智光寺山古墳）	〃	〃	〃	〃	〃	前方後方墳　第Ⅲ項参照		半壊	8・18・25・42	
6	南塚古墳（八王寺南塚）	〃	〃	〃	〃	〃	前方後円墳　第Ⅲ項参照	石製品・刀剣	半壊	8・25・43	
7	姫塚古墳	〃	姫ノ垣内	〃	古墳	平地	水田中に1本松あるのみ		半壊	8・25	
8	月読神社古墳	〃	池平	〃	〃	低台地	円墳か　径約20m・高さ2.5m 墳丘に忠魂碑		半壊	25	
9	内山古墳	〃	中	〃	古墳後期	台地		須恵器	消滅	25	
10	立居地蔵古墳	〃	杉谷	〃	古墳	〃			全壊	25	
11	城山遺跡	〃	内山	散布地	弥生・中世	丘陵端	杉谷池の西南　大住城跡裾	弥生土器・石斧・中世土器		25	
12－1	城山1号墳	〃	〃	古墳	古墳	丘陵			半壊	25	
12－2	2号墳	〃	〃	〃	古墳後期	丘陵頂	円墳		完存		
12－3	3号墳	〃	〃	〃	〃	〃	横穴式石室　石材露出		半壊		
12－4	4号墳	〃	〃	〃	〃	〃	横穴式石室　石材散乱		〃		
13	岡村古墳	〃	姫ノ垣内	〃	古墳	平地		埴輪	〃	25	
14－1	郷士塚1号墳	薪	平谷	〃	〃	丘陵頂			全壊	25	
14－2	2号墳	〃	西山	〃	〃	〃	円墳　径30m・高さ3.5m	土師器破片・鎗身・鉄斧・鉄鏃・埴輪（家・鳥）	〃	24	
14－3	3号墳	〃	〃	〃	〃	〃			〃	25	
14－4	4号墳	〃	〃	〃	古墳後期	丘陵腹	円墳　径30m・高さ2m　横穴式石室 巨石残存		半壊		
14－5	5号墳	〃	畠	〃	〃	〃	横穴式石室	須恵器	〃		
15	大欠古墳	〃		〃	〃	丘陵端	横穴式石室	須恵器・瓦器・刀・馬具	全壊		
16	狼谷（小谷）遺跡	〃	狼谷	散布地	弥生中後期	丘陵	南北850m・東西300m	弥生土器・石包丁・石斧		25	
17－1	畑山1号墳	〃	西山	古墳	古墳後期	丘陵腹	横穴式石室		半壊	25	
17－2	2号墳	〃	〃	〃	〃	〃	横穴式石室		〃		
18	畑山遺跡	〃	〃	散布地	〃	丘陵裾	南北120m・東西60m	須恵器		25・45	

19—1	西山1号墳	薪	溜池	古墳	古墳後期	丘陵端	横穴式石室　石材1個露出	鐙・剣・土師器	半壊	25	
19—2	3号墳	〃	〃	〃	〃	丘陵腹	横穴式石室　側石一部露出		〃	25	
20	石ケ谷古墳	〃	〃	〃	〃	〃			全壊	25	
21	牛の宮古墳	〃	〃	〃	古墳	台地		土器	半壊	25	
22—1	堀切1号墳	〃	堀切谷	〃	古墳後期	丘陵頂	横穴式石室	須恵器・土師器・刀剣	〃	25	
22—2	2号墳	〃	〃	〃	〃	〃	横穴式石室		〃	25	
22—3	3号墳	〃	〃	〃	〃	丘陵腹	横穴式石室		〃	25	
22—4	4号墳	〃	〃	〃	〃	丘陵稜	横穴式石室　第Ⅲ項参照	円筒埴輪片・須恵質陶棺片	消滅	25・59	昭和54年発掘調査
22—5	5号墳	〃	〃	〃	古墳	丘陵頂	円墳　薪小学校裏山	円筒埴輪片	半壊		
22—6	6号墳	〃	〃	〃	〃	〃	円墳　薪小学校裏山		〃		
22—7	7号墳	〃	〃	〃	古墳後期	〃	円墳　第Ⅲ項参照	埴輪（人物・馬・器財・円筒）・器台	消滅	59	昭和54年発掘調査
22—8	8号墳	〃	〃	〃	〃	〃	古墳残欠　第Ⅲ項参照		〃	59	〃
22—9	9号墳	〃	〃	〃	〃	〃	円墳　第Ⅲ項参照	須恵器・銀環・ガラス玉・鉄刀	〃	59	〃
22—10	10号墳	〃	里ノ内	〃	古墳	〃	〃		半壊		
23—1	堀切1号横穴	〃	堀切谷	〃	古墳後期	丘陵腹	横穴　北向き斜面	伝須恵器	消滅	35	
23—2	2号横穴	〃	〃	〃	〃	〃	〃	伝須恵器	〃	35	
23—3	3号横穴	〃	大欠	〃	〃	〃	〃　北向き斜面	伝須恵器杯14個	〃	35	
23—4	4号横穴	〃	堀切谷	〃	〃	〃	〃　東向き斜面 長さ約10m、高さ2m、幅2m	伝須恵器杯・鉄刀	〃	35	
23—5	5号横穴	〃	〃	〃	〃	〃	〃　東向き斜面 長さ現在4.6m、高さ0.8m、幅2m	須恵器杯身・土師器杯・人骨片（頭蓋骨片・下顎骨片・歯）	〃	35	昭和44年発掘調査
23—6	6号横穴	〃	〃	〃	〃	〃	〃　東向き斜面 長さ現在4.8m、高さ1.8m、幅2.6m～1.5m	須恵器（広口壺・無蓋高杯・同破片・有蓋高杯・台付長頸壺・杯）・家形石棺・金環・刀子・人骨1体分	〃	35	〃
23—7	7号横穴	〃	〃	〃	〃	〃	〃　第Ⅲ項参照	土師器	〃	59	昭和54年発掘調査
23—8	8号横穴	〃	〃	〃	〃	〃	〃　第Ⅲ項参照	須恵器	〃	59	〃
23—9	9号横穴	〃	〃	〃	〃	〃	〃　第Ⅲ項参照	須恵器	〃	59	〃
23—10	10号横穴	〃	〃	〃	〃	〃	〃　第Ⅲ項参照	須恵器・土師器・銙帯金具・鉄片・釘・人骨	〃	59	〃
24	薪遺跡	〃	堂後ほか	散布地	古墳後期～平安	台地	南北800m・東西900m	弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・平瓦・土製円板			昭和42年一部発掘調査

番号	名称	所在地 大字	所在地 小字	種類	時代	立地	遺跡の概要	遺物	現状	文献	備考
25	西薪遺跡	薪	大欠	墳墓か	奈良前期か	丘陵腹	砂と木炭のつまった大甕出土	須恵器大甕（高49cm）		25	
26－1	天理山1号墳	〃	山垣外	古墳	古墳	丘陵頂	円墳　径15m・高さ2m　粘土槨	円筒埴輪・須恵器（高杯）	半壊		
26－2	2号墳	〃	〃	〃	〃	〃	円墳　径15m・高さ1～2m		完存		
26－3	3号墳	〃	〃	〃	〃	〃	円墳　径18m・高さ2～3m		〃		
26－4	4号墳	〃	〃	〃	〃	丘陵腹	円墳　径15m・高さ2m		〃		
27－1	小欠1号墳	〃	小欠	〃	古墳後期	〃	径20m・高さ3～4m	須恵器・土師器	半壊	25	
27－2	2号墳	〃	〃	〃	〃	〃			全壊		
27－3	3号墳	〃	〃	〃	〃	〃			〃	25	
28	田辺遺跡	田辺	田辺ほか	散布地	古墳～中世	丘陵裾	南北250m・東西250m	土師器・須恵器・瓦器・陶器・埴輪・瓦		25	
29	興戸遺跡	興戸	小モ詰ほか	〃	弥生～中世	平地	南北500m・東西600m　第Ⅲ項参照	弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・青磁・白磁		49・63	昭和50年7月・54年一部発掘調査
30	興戸廃寺	〃	山添	寺院跡	奈良～鎌倉	台地	府立山城園芸研究所内の西方台地 第Ⅲ項参照	瓦類		16・27	
31－1	興戸1号墳	田辺	丸山	古墳	古墳前期	丘陵頂	前方後円墳　第Ⅲ項参照	鉄刀	半壊	21・75	
31－2	2号墳	興戸	御垣内	〃	〃	〃	円墳　第Ⅲ項参照	鏡3以上・管玉・石釧・車輪石・鍬形石・剣・埴輪（家形・円筒）	〃	21・25・47・75	昭和18年4月25日調査
31－3	3号墳	〃	〃	〃	古墳	丘陵稜	古墳か			75	
31－4	4号墳	田辺	丸山	〃	〃	〃	円墳		全壊	74・75	昭和55年10月発掘調査
31－5	5号墳	〃	〃	墳墓	弥生後期	〃	方形台状墓　第Ⅲ項参照	弥生土器	半壊	74・75	昭和55年10月発掘調査 調査後保存
31－6	6号墳	興戸	御垣内	古墳	古墳	〃	円墳		完存		
31－7	7号墳	〃	〃	〃	〃	〃	円墳		半壊		
31－8	8号墳	〃	〃	〃	〃	丘陵腹	古墳か				
31－9	9号墳	田辺	丸山	〃	〃	丘陵稜	円墳		半壊		
31－10	10号墳	〃	〃	〃	〃	〃	円墳		〃		
32	酒壷古墳	興戸	宮ノ前	〃	〃	〃	円墳　径6.3m・高さ3m		完存	25	
33	郡塚古墳	〃	山添	〃	〃	平地			全壊	25	
34	大原古墳	〃	ボケ谷	〃	〃	丘陵腹					
35	飯岡車塚古墳	飯岡	西原	〃	古墳前期	〃	前方後円墳　第Ⅲ項参照	玉類（硬玉製勾玉・碧玉製管玉・瑠璃小玉）・石製品（石釧・車輪石・鍬形石・石盒）・刀・剣	半壊	1・7・15・16・25・44・53	昭和51年3月発掘調査
36	弥陀山古墳	〃	中峯	〃	古墳	丘陵頂	円墳　第Ⅲ項参照		〃	7・25	

37	ゴロゴロ山古墳	飯岡	中峯	古墳	古墳前期	丘陵頂	円墳　第Ⅲ項参照		半壊	7・25・41	
38	薬師山古墳	〃	〃	〃	〃	〃	円墳　墳頂に薬師堂　第Ⅲ項参照		〃	7・25	
39	金泥山古墳	〃	南原	〃	古墳	〃		伝土器	全壊	25・30	
40	トヅカ（キンリン・サン）古墳	〃	小山	〃	古墳中期	台地	円墳　第Ⅲ項参照	鏡3・玉類（勾玉・管玉・小玉）・刀剣・馬具	半壊	7・14・25	
41	飯岡横穴	〃	久保田	〃	古墳後期	丘陵腹	横穴　第Ⅲ項参照	須恵器・土師器・陶磁器・瓦器	〃	7・25・65	昭和53年発掘調査
42	田辺天神山（三山木）遺跡	三山木	天神山	集落跡	弥生後期	丘陵	第Ⅲ項参照	弥生土器・刀子・異形銅器・砥石・石鏃・石斧		32・33・36・46・54・58	昭和43年発掘調査 調査後保存展示
43	新宗谷古墳	三山木	〃	古墳	古墳	丘陵稜		須恵器破片		25	
44－1	下司1号墳	多々羅	谷奥	〃	古墳後期	山腹	第Ⅲ項参照	須恵器・土師器・陶棺片・金銅釘・鉄鏃	半壊	12・13・25・26・28	昭和38年発掘調査
44－2	2号墳	〃	〃	〃	〃	〃	円墳　第Ⅲ項参照	須恵器・土師器・瓦器・鉄釘・鉄鐶	〃	25・26・28	〃
44－3	3号墳	〃	〃	〃	〃	〃	円墳　第Ⅲ項参照		〃	25・26・28	〃
44－4	4号墳	〃	〃	〃	〃	〃	横穴式石室　石材散乱　第Ⅲ項参照		〃	25・28	
44－5	5号墳	〃	〃	〃	〃	〃	横穴式石室		〃		
45	大御堂古墳	普賢寺	下司	〃	〃	〃	横穴式石室（両袖式）　羨道部最下段の石積みのみ残存 全長約7.8m　玄室幅1.8m		〃	26・28	昭和38年発掘調査
46	普賢寺跡	〃	下大門	寺院跡	奈良前期～	丘陵	塔心礎露出　第Ⅲ項参照	瓦類・土師器・灰釉陶器		11・13・16・17・18・27・38・79	
47	御所内遺跡	〃	宇頭城	単独出土地	奈良後期	丘陵腹		土師器（広口壷） 和銅開珎5		29	
48－1	王居谷1号墳	〃	王子谷	古墳	古墳後期	丘陵稜	円墳　白山講社裏丘陵 径20m・高さ2.5m 横穴式石室　石材3個露出		半壊	25	
48－2	2号墳	〃	〃	〃	古墳	〃	円墳		完存		
48－3	3号墳	〃	〃	〃	〃	〃	円墳		〃		
48－4	4号墳	〃	〃	〃	〃	〃	円墳		〃		
49	御家古墳	水取	御家	〃	古墳後期	山腹	円墳　横穴式石室　石材露出		半壊	25	
50	錆古墳	〃	平作	〃	〃	〃	横穴式石室		〃	25	
51	丸塚古墳	天王	中別所	〃	古墳	〃	古墳か			25	
52－1	シオ1号墳	〃	裂石	〃	古墳後期	〃	第Ⅲ項参照		半壊	12・13・25	
52－2	2号墳	〃	〃	〃	〃	〃	第Ⅲ項参照		〃		
53	大西館跡	普賢寺	下大門	館跡		丘陵端	大西氏の館跡		消滅		
54	山崎1号墳	三山木	山崎	古墳	古墳	〃	円墳　山崎公民館のところ	勾玉	全壊	1・25	

番号	名称	所在地 大字	所在地 小字	種類	時代	立地	遺跡の概要	遺物	現状	文献	備考
55	2号墳（八王寺塚古墳）	三山木	山崎	古墳	古墳後期	丘陵端	円墳　山崎神社内　横穴式石室 石材露出	須恵器・瓦器・勾玉・金環	半壊	23・25	
56	3号墳（権現塚古墳）	〃	〃	〃	古墳	丘陵稜	円墳　径10m・高さ1.5m		〃	25・78	昭和46年一部発掘調査
57	山崎遺跡	〃	〃	散布地	縄文後期	丘陵頂	山崎神社付近	石棒・異形石器		9・25	
58	三山木廃寺	宮津	佐牙垣内	寺院跡	奈良前期～鎌倉	丘陵	佐牙神社南方　第Ⅲ項参照	瓦類	竹林	6・10・16・17・27・48	
59	西羅遺跡	三山木	芝山ほか	散布地	弥生	台地	南北250m・東西150m	磨製石斧			
60	南山遺跡	〃	南山ほか	〃	弥生～	〃	南北200m・東西150m	サヌカイト片・土師器・須恵器			
61	多々羅遺跡	多々羅	東平川原	〃		〃		土師器・須恵器			
62	江津古墳	宮津	西浦	古墳	古墳後期	丘陵腹	横穴式石室　巨石1個残存		半壊		
63	宮津古墳	〃	北浦	〃	古墳	丘陵頂	やや盛りあがるのみ頂部に「天正」銘の石地蔵あり	土師器片(壷)・炭	〃		
64	菖蒲谷古墳	三山木	奥山田	〃	古墳後期	丘陵端	横穴式石室 全長11m・高さ1m・幅2m　石材散乱	須恵器	〃	25	
65	奥山田池遺跡	〃	〃	散布地		丘陵裾	菖蒲谷古墳の南西400m　南北350m・東西200m	土師器(皿)・須恵器(坩)・布目瓦		25	
66—1	宮の口1号墳	宮津	白山	古墳	古墳後期	丘陵腹	宮ノ口白山神社裏山 横穴式石室　石材1個残存		半壊	25	
66—2	2号墳	〃	〃	〃	〃	〃	横穴式石室		全壊		
66—3	3号墳	〃	〃	〃	〃	〃	横穴式石室		半壊		
67	大住（内山）城跡	大住	内山	城跡	中世	丘陵頂	大住中学校東方の丘陵　南北200m・東西700mの五稜形　大住氏居城			31・67	
68	興戸城跡	興戸	南鉾立	〃	〃	〃	南北朝時代藤原長門守秀長の居城		消滅	31・47・69	
69	田辺城跡	田辺	丸山	〃	〃	〃	田辺公園西方の丘陵　第Ⅲ項参照			31・68	
70	天王畑城（普賢寺城）跡	天王	高ケ峯	〃	〃	山頂	朱智神社の北方丘陵　第Ⅲ項参照			31・73	
71	水取城跡	水取	御家	〃	〃	丘陵	西光寺北西の丘陵 南北朝時代水取伊勢守義勝の居城			31・72	
72		宮津	鳥羽口	散布地		平地	南北250m・東西200m	土師器			
73	宮の下遺跡	三山木 宮津	上切山 灰崎	〃		〃	南北300m・東西250m	土師器・須恵器			
74	山崎北方遺跡	三山木	柳ケ町	〃		〃		土師器			
75	古屋敷遺跡	〃	荒木ほか	〃	中近世	〃	南北550m・東西400m この付近条里遺構よく残る	土師器・須恵器・丸瓦・平瓦・瓦器・陶器		64	昭和53年一部発掘調査 条里遺構確認

76		三山木	田中	散布地	奈良	平地	南北250m・東西250m	土師器・須恵器・サヌカイト				
77		草内	南垣内ほか	〃		〃	南北500m・東西300m	土師器・須恵器				
78		〃	新池ほか	〃		〃	南北250m・東西250m	土師器				
79	興戸宮ノ前遺跡	興戸	宮ノ前ほか	〃	室町	台地	南北300m・東西400m	土師器・須恵器・瓦器		76		昭和55年一部発掘調査
80		多々羅	新宮前	〃		丘陵裾	南北70m・東西120m	土師器				
81	河原遺跡	河原	受田ほか	〃		平地	南北100m・東西100m	土師器・須恵器				
82	尼ケ池遺跡	田辺	西垣内ほか	〃	平安	台地	南北250m・東西150m	土師器・須恵器・瓦器				
83	稲葉（東薪）遺跡	〃	戸絶	〃	〃	平地	南北800m・東西650m	土師器・須恵器（墨書土器あり）・瓦器		56		昭和51年一部発掘調査
84	棚倉孫神社遺跡	〃	棚倉	〃		丘陵裾	棚倉孫神社南接　南北180m・東西150m	土師器・須恵器				
85	三野遺跡	大住	三野	〃		平地	南北400m・東西150m	土師器・須恵器				
86	東林遺跡	〃	八王寺	〃		〃	南北250m・東西200m	須恵器・平瓦				
87		松井	大峯	〃		丘陵裾	南北800m以上・東西700m	土師器・須恵器				
88		〃	北ケ市ほか	〃		〃	南北850m以上・東西700m	弥生土器・土師器・須恵器・瓦器				
89	松井窯跡群	〃	交野ケ原	窯跡	長岡	丘陵腹	須恵器窯　第Ⅲ項参照	須恵器・土師器・布目瓦・土馬				昭和55年・56年発掘調査
90	内田城跡	打田	宮前	城跡		丘陵頂	打田集落南方の丘陵（標高260m付近）					
91	大谷古墳	興戸	大谷	古墳	古墳	丘陵裾	円墳　径15m・高さ3m		完存			
92	興戸宮ノ前窯跡	〃	宮ノ前	窯跡	古墳後期	丘陵端	須恵器窯　第Ⅲ項参照	須恵器	半壊			
93	口駒ケ谷古墳	三山木	口駒ケ谷	古墳	〃	丘陵腹	横穴式石室		〃			
94	口駒ケ谷遺跡	〃	〃	館跡	中世	丘陵頂	堀　南北100m・東西150m	須恵器・土師器・陶器・磁器・瓦器				昭和56年一部発掘調査
95	飯岡東原古墳	飯岡	東原	古墳	古墳後期	丘陵腹	木棺直葬　第Ⅲ項参照	須恵器・土師器		66		昭和53年3月発掘調査
96	飯岡遺跡	〃	南原ほか	集落跡	弥生～	丘陵	竪穴住居（弥生後期）・方形周溝墓（弥生後期） 南北400m・東西700m	弥生土器・須恵器・土師器・陶器		55		昭和34年・57年一部発掘調査
97	草路城跡	草内	宮ノ後	城跡	近世	平地	現咋岡神社　周囲に堀			70		
98	西平川原館跡	三山木	西平川原	館跡	中世	丘陵頂		平瓦・軒平瓦				
99	南山城跡	〃	南山	城跡	近世	〃	南山西公民館北　一辺70mの堀 旗本浅井光政の居城			71		
100—1	責谷1号墳	大住	責谷	古墳	古墳後期	丘陵裾	横穴式石室　羨道部露出		半壊			
100—2	2号墳	〃	〃	〃	〃	丘陵頂	横穴式石室	須恵器（提瓶）	消滅			
101		多々羅	七瀬川	散布地	中世	丘陵腹	同志社校地内	土師器・須恵器				
102	都谷遺跡	三山木	〃	館跡	中世末～近世	丘陵端	同志社校地内	土師器・須恵器・陶磁器		57		昭和52年発掘調査

番号	名称	所在地 大字	所在地 小字	種類	時代	立地	遺跡の概要	遺物	現状	文献	備考
103	新宗谷窯跡	三山木	七瀬川	窯跡	奈良	丘陵腹	同志社校地内　第Ⅲ項参照	須恵器			
104	新宗谷館跡群	多々羅	中垣内	城砦跡	中世	丘陵端	同志社校地内　Loc. 3	青磁・白磁・石臼・鏡	保存		
105	まむし谷窯跡	〃	谷奥	窯跡	奈良～平安	丘陵腹	同志社校地内　第Ⅲ項参照	須恵器			昭和56年発掘調査 調査後うめ戻し保存
106		〃	〃	散布地	近世	〃	同志社校地内　Loc. 11	近世陶器・磁器			
107		〃	〃	館跡	〃	丘陵端	同志社校地内　Loc. 5	土師器・羽釜			
108	新宮前遺跡	〃	〃	散布地	中近世	〃	新宮社南東30m　東西30m・南北40m	羽釜・明末陶器・磁器			
109		〃	新宮前	〃	近世	丘陵裾	同志社校地内　Loc. 8	近世陶器・磁器			
110		普賢寺	下司	〃	中近世	〃	同志社校地内　Loc. 12	中近世陶磁器			
111		〃	〃	館跡		丘陵端					
112	小田垣内遺跡	〃	小田垣内	館城跡		〃	田宮館裏山　第Ⅲ項参照				
113		〃	打垣内	〃		〃		土師器			
114		〃	〃	〃		〃					
115—1	口仲谷1号墳	松井	口仲谷	古墳	古墳	丘陵頂	古墳か　径10m・高さ1m		完存		
115—2	2号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃		〃		
115—3	3号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃　中央部に凹みあり		〃		
115—4	4号墳	〃	〃	〃	〃	〃	〃　〃		〃		
116	虚空蔵谷遺跡	大住	虚空蔵谷	散布地	弥生	丘陵腹		磨製石鏃・砥石			
117	高ケ峯遺跡	天王	高ケ峯	〃	旧石器	〃		サヌカイト石核		62	
118		松井	相合ほか	〃		平地	南北200m・東西200m	土師器・須恵器			
119		大住	下西野	〃		〃	南北150m・東西150m	土師器			
120		〃	堂附	〃		〃	南北200m・東西200m	土師器			
121		〃	門田ほか	〃		〃	南北550m・東西700m	弥生土器・土師器・須恵器			
122		〃	北角ほか	〃		〃	南北250m・東西200m	土師器			
123		〃	久保田ほか	〃		〃	南北300m・東西150m	土師器			
124		〃	三本木ほか	〃		〃	南北300m・東西300m	土師器			
125		〃	志保	〃		〃	南北100m・東西100m	土師器			
126		〃	時小林ほか	〃		〃	南北100m・東西100m	土師器			
127		〃	地内山ほか	〃		〃	南北150m・東西250m	土師器			
128		田辺	西浜ほか	〃		〃	南北300m・東西200m	土師器			
129		〃	中ノ島ほか	〃		〃	南北450m・東西700m	土師器・瓦器			

130		東	青上ほか	散布地		平地	南北100m・東西150m	土師器			
131		〃	七反割ほか	〃		〃	南北800m・東西300m	土師器・須恵器			
132		薪	城ケ前	〃		〃	南北200m・東西100m	土師器			
133		田辺	竹脇池	〃		〃	南北100m・東西50m	土師器			
134		東	鍵田	〃		〃		土師器			
135		草内	橋折ほか	〃		〃	南北300m・東西200m	土師器			
136		飯岡	大将軍ほか	〃		〃	南北1,100m・東西250m	土師器・須恵器・瓦器			
137		興戸	川原谷	〃		〃	南北100m・東西70m	土師器			
138		三山木	野神	〃		〃	南北130m・東西200m	土師器			
139		〃	直田ほか	〃		〃	南北350m・東西250m	土師器			
140		〃	遠藤	〃		〃	南北100m・東西150m	土師器			
141		宮津	下川原	〃		〃	南北50m・東西100m	土師器・須恵器			
142		三山木	西羅	〃		丘陵頂	南北100m・東西200m	土師器			
143		宮津	宮ノ下	〃		平地	南北200m・東西50m	土師器・須恵器			
144		〃	屋敷田ほか	〃		〃	南北350m・東西150m	須恵器			
145		〃	池ノ内	〃		〃	南北100m以上・東西120m	土師器			
146		水取	御家ほか	〃		〃	南北450m・東西100m	土師器			
147		〃	高井鎌	〃		〃	南北70m・東西40m	土師器			
148		田辺	茂ケ谷	〃		丘陵裾		土師器			
149		大住	八河原	〃		低台地		土師器			
150		〃	中西野	〃		平地		瓦器			
151		〃	杉谷	〃		〃	南北130m・東西200m	土師器			
152		〃	塔ノ筋	〃		丘陵裾		土師器			
153		草内	五反田	〃		平地		土師器			
154		興戸	下ノ河原	〃		〃		土師器			
155		三山木	七瀬川	〃		〃		土師器			
156		宮津	白山ほか	〃		〃		須恵器			
157	木原屋敷跡	三山木	芝山	館跡		丘陵					

付表２　田辺町埋蔵文化財関係文献一覧表

番号	文　　献
	明治38年（1905）
1	岩井武俊　「山城国相楽綴喜両郡の古墳」（『考古界』５－１）
	明治41年（1908）
2	京都府教育会綴喜郡部会　『山城綴喜郡誌』
	明治45年（1912）
3	岩井武俊　「山城国綴喜郡大住村松井の横穴」（『歴史地理』20－４）
	大正３年（1914）
4	中川修一　「山城綴喜郡田辺草内付近条里坪並考」（『歴史地理』23－６）
	大正６年（1917）
5	長江正一　「京都府綴喜郡大住村字松井の横穴」（『考古学雑誌』７－８）
	大正９年（1920）
6	梅原末治　「三山木村ノ廃寺」（『京都府史蹟勝地調査会報告』２、京都府）
7	梅原末治　「飯ノ岡ノ古墳」（『京都府史蹟勝地調査会報告』２、京都府）
	大正11年（1922）
8	梅原末治　「大住村車塚古墳」（『京都府史蹟勝地調査会報告』３、京都府）
	大正12年（1923）
9	梅原末治　「三山木村山崎ノ石棒ト同地ノ古墳」（『京都府史蹟勝地調査会報告』４、京都府）
10	梅原末治　「三山木廃寺（補遺）」（『京都府史蹟勝地調査会報告』４、京都府）
	昭和５年（1930）
11	佐藤虎雄　「普賢寺遺蹟」（『京都史蹟』１－３）
12	佐藤虎雄　「普賢寺谷の古墳」（『京都史蹟』１－４）
13	佐藤虎雄　「普賢寺の遺蹟」（『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』11、京都府）
	昭和13年（1938）
14	梅原末治　「山城飯岡トヅカ古墳」（『日本古文化研究所報告』９、日本古文化研究所）
15	梅原末治　「山城飯岡車塚古墳」（『日本古文化研究所報告』９、日本古文化研究所）
16	田中重久　「平安奠都前の寺阯と其出土瓦に就いて」（『夢殿論誌』18）
	昭和15年（1940）
17	田中重久　「山城国の郡名寺院」（『史迹と美術』11－６）
	昭和18年（1943）
18	毛利　久　「山城国観音寺新出土の古瓦について」（『史迹と美術』14－１）
	昭和23年（1948）
19	藤岡謙二郎・谷岡武雄　「山城盆地南部景観の変遷」（『日本史研究』７、日本史研究会）
	昭和26年（1951）
20	西田直二郎　『洛南大住村史』
	昭和30年（1955）
21	梅原末治　「田辺町興戸古墳」（『京都府文化財調査報告』21、京都府教育委員会）
22	村田太平　『郷土田辺の歴史と傳説』
	昭和31年（1956）
23	田辺郷土史会　「京都府綴喜郡田辺町三山木山崎神社の瓦器」（『古代学研究』15・16）
	昭和34年（1959）
24	西川　滋　「京都府田辺町郷土塚２号墳出土の鳥形埴輪」（『古代学研究』20）
25	田辺郷土史会　『田辺町郷土史－古代篇』
	昭和38年（1963）
26	京都大学考古学研究会　「京都府下司古墳群発掘調査概報」（『第６とれんち』）

番号	文	献
27	田辺郷土史会	『田辺町郷土史－社寺篇』
	昭和39年（1964）	
28	堤　圭三郎	「普賢寺所在古墳発掘調査概要」（『埋蔵文化財調査概報』1964、京都府教育委員会）
29		「京都府下発見の和同開珎」（『古代文化』12－5）
	昭和40年（1965）	
30	京都大学考古学研究会	「南山城地方踏査報告－その1」（『第13とれんち』）
	昭和42年（1967）	
31	中島　至	『京都府の城』（『日本城郭全集』8）
	昭和43年（1968）	
32	森　浩一	「田辺天神山弥生集落」（『同志社時報』33）
33	山田良三	『三山木弥生式遺跡発掘調査報告』（田辺町教育委員会・田辺町文化財保護委員会）
34	田辺町	『京都府田辺町史』
	昭和44年（1969）	
35	高橋美久二	「堀切横穴発掘調査報告」（『埋蔵文化財調査概報』1969、京都府教育委員会）
	昭和45年（1970）	
36	山田良三	「三山木出土の異形銅器」（『日本古文化論攷』）
37	高橋美久二	「相楽・綴喜遺跡分布調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』1970、京都府教育委員会）
38	奈良国立博物館	『飛鳥白鳳の古瓦』
	昭和46年（1971）	
39	高橋美久二	「相楽・綴喜両郡第二次遺跡分布調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』1971、京都府教育委員会）
	昭和47年（1972）	
40	京都府教育委員会	『京都府遺跡地図』
41	下村晴文	「綴喜郡－歴史的環境」（平良泰久・下村晴文編『南山城の前方後円墳』、竜谷大学考古学資料室）
42	万波俊介	「大住車塚古墳」（平良泰久・下村晴文編『南山城の前方後円墳』、竜谷大学考古学資料室）
43	奥村清一郎	「大住南塚古墳」（平良泰久・下村晴文編『南山城の前方後円墳』、竜谷大学考古学資料室）
44	堀　守	「飯岡車塚古墳」（平良泰久・下村晴文編『南山城の前方後円墳』、竜谷大学考古学資料室）
	昭和48年（1973）	
45	西川　滋 吉村正親	「ゴーシ塚遺跡」（『筒城』19、田辺郷土史会）
46	森　浩一	「田辺天神山遺跡」（『日本遺跡便覧』）
	昭和49年（1974）	
47	村田太平他編	『興戸の歴史』（興戸の歴史編集委員会）
	昭和50年（1975）	
48	京都国立博物館	『古瓦図録』
49	江谷　寛 粟野　謨	『北鉾立発掘調査概要』（田辺町教育委員会）
50	平良泰久	「南山城の後期古墳と氏族」（『京都考古』14、京都考古刊行会）
51	森　浩一	「近畿地方の隼人」（大林太良編『日本古代文化の探求　隼人』）
	昭和51年（1976）	
52	堤　圭三郎	「石清水八幡宮から奈良山まで」（樋口隆康編『京都考古学散歩』）
53	吉村正親	『飯岡車塚古墳発掘調査報告』（田辺町教育委員会）
54	森　浩一編	『京都府綴喜郡田辺天神山弥生遺跡』（『同志社大学文学部考古学調査記録』5、同志社大学考古学研究室）

番号	文	献
55	森　浩一 大野左千夫	「飯岡遺跡の住居址と遺物」（森　浩一編『京都府綴喜郡田辺天神山弥生遺跡』同志社大学考古学研究室）
	昭和52年（1977）	
56	平良泰久	「東薪遺跡発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』1977、京都府教育委員会）
57	鈴木重治 松藤和人 編	『京都府田辺町都谷中世館跡』（『同志社大学校地学術調査委員会調査資料』11、同志社大学校地学術調査委員会）
58	都出比呂志	「高地にある集落」（門脇禎二編『史跡でつづる京都の歴史』）
	昭和53年（1978）	
59	林　正史	「京都府堀切古墳群及び横穴群」（『日本考古学年報』31）
	昭和54年（1979）	
60	上田正昭 金　達　寿 森　浩一	「シンポジウム　南山城の古代文化」（『日本のなかの朝鮮文化』41）
61	前川宗男他編	『私達の松井』（私達の松井編集委員会）
62	鈴木重治	「山城出土の旧石器」（『考古学ジャーナル』167）
	昭和55年（1980）	
63	山口　博 大槻真純	「興戸遺跡発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』1980、京都府教育委員会）
64	同志社大学校地学術調査委員会編	「古屋敷遺跡発掘調査報告」（『田辺町埋蔵文化財調査報告書』1、田辺町教育委員会）
65	同志社大学校地学術調査委員会編	「飯岡横穴発掘調査報告」（『田辺町埋蔵文化財調査報告書』1、田辺町教育委員会）
66	同志社大学校地学術調査委員会編	「付載　飯岡東原古墳の発掘調査」（『田辺町埋蔵文化財調査報告書』1、田辺町教育委員会）
67	乾　幸次	「大住城」（竹岡　林・近藤　滋・河原純之編『日本城郭大系』11、京都・滋賀・福井）
68	乾　幸次	「田辺城」（竹岡　林・近藤　滋・河原純之編『日本城郭大系』11、京都・滋賀・福井）
69	乾　幸次	「興戸城」（竹岡　林・近藤　滋・河原純之編『日本城郭大系』11、京都・滋賀・福井）
70	乾　幸次	「草路城」（竹岡　林・近藤　滋・河原純之編『日本城郭大系』11、京都・滋賀・福井）
71	乾　幸次	「南山城」（竹岡　林・近藤　滋・河原純之編『日本城郭大系』11、京都・滋賀・福井）
72	乾　幸次	「水取城」（竹岡　林・近藤　滋・河原純之編『日本城郭大系』11、京都・滋賀・福井）
73	乾　幸次	「天王畑城」（竹岡　林・近藤　滋・河原純之編『日本城郭大系』11、京都・滋賀・福井）
	昭和56年（1981）	
74	奥村清一郎	「興戸古墳群発掘調査略報」（『筒城』26、田辺郷土史会）
75	奥村清一郎 西川英弘	「興戸古墳群発掘調査概報」（『田辺町埋蔵文化財調査報告書』2、田辺町教育委員会）
76	奥村清一郎 西川英弘	「興戸宮ノ前遺跡発掘調査概報」（『田辺町埋蔵文化財調査報告書』2、田辺町教育委員会）
77	西川英弘 鷹野一太郎	「郷士塚古墳群試掘調査概報」（『田辺町埋蔵文化財調査報告書』2、田辺町教育委員会）
78	江谷　寛 粟野　謨	「権現塚古墳発掘調査概報」（『田辺町埋蔵文化財調査報告書』2、田辺町教育委員会）
79	星野猷二	「鐙瓦製作と分割型」（『考古学雑誌』67―2）

昭和57年3月30日　印刷
昭和57年3月31日　発行

田辺町遺跡分布調査概報

（田辺町埋蔵文化財調査報告書　第3集）

編集・発行　田辺町教育委員会
〒610-03 京都府綴喜郡田辺町
大字田辺小字丸山214番地
電話 07746－2－2552

印　　刷　株式会社 奈良明新社
〒630 奈良市橋本町36番地
電話 0742－23－3131